令和５年度　和歌山大学　e-annual report

＜ダイジェスト版＞（分析コメント含む）

令和６年１０月

目 次

１．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P2

２．入学時・入学直後の情報
２－１　入学者選抜の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P3

３．在学中の情報
３－１　各授業科目における到達目標の達成状況・・・・・・・・・・・・・・・・ P7
３－２　各授業科目における到達目標の達成状況 （授業科目に関する情報）・・・・ P11
３－３　学修時間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P15
３－４　教員一人あたりの学生数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P18

４．卒業時・卒業後の情報
４－１　学位の取得状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P19
４－２　学生の成長実感・満足度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P22
４－３　ディプロマ・ポリシーに定める資質・能力等の修得状況・・・・・・・・・ P26
４－４　進路の決定状況等の卒業後の状況 （就職率や進学率等)・・・・・・・・・ P32
４－５　修業年限期間内に卒業する学生の割合、留年率、中途退学率・・・・・・・ P33
４－６　卒業生からの評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P36
４－７　卒業生に対する評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P43

１．はじめに

「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン」（平成 30 年 11 月 26 日中央教育審議会答申）において、高等教育改革の実現すべき方向性として

・高等教育機関がその多様なミッションに基づき、学修者が「何を学び、身に付けることができるのか」を明確にし、学修の成果を学修者が実感できる教育を行っていること

などが掲げられ、「学修者本位の教育の実現」が謳われています。

和歌山大学においても、本学が有する強みと特色を生かして、「何を学び、身に付けることができたのか」という学修者本位の視点に立ち、学位プログラムについて日常的な点検（モニタリング）を行うとともに、総合的な点検・評価を行い、その結果をもとに教育改善に努めています。

点検・評価を行うためのデータ・情報のうち、学生の学修成果や大学全体の教育成果に関係する情報について、『e-annual report』としてホームページで公表しています。公表に当たっては、「入学前・入学直後の情報」「在学中の情報」「卒業時・卒業後の情報」「その他の情報」に分類することで、情報の検索が容易となるよう工夫するとともに、ホームページでは最新データをご確認いただくことができます。当冊子は＜ダイジェスト版＞として年度毎に事項を抽出してとりまとめたものです。

＜和歌山大学ホームページ：e-annual report＞
https://www.wakayama-u.ac.jp/about/public_information_gallery/education-information/qualityassurance/index.html

２．入学時･入学直後の情報

２－１　入学者選抜の状況

入学者選抜については、「入学者受入れの方針」を定め、これに則して大学として求める資質・能力を有する者を入学者として適切に選抜しています。

和歌山大学学士課程　入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

１．求める学生像

高等学校あるいはこれに相当する教育機関等における学習や活動を通して、次の知識・技能、能力、態度を有する人を求める。

（1）知識・技能
　・大学入学後の専門を学ぶための基礎となる知識・技能を有する人
（2）思考力・判断力・表現力
　・課題解決に取り組むための基礎となる思考力・判断力・表現力を有する人
（3）主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度
　・多様で広い知的関心をもち、他者と関わって、主体的に学ぼうとする意欲や態度を有する人
　・身につけた知識や技能を活用し、課題解決に取り組む意欲や態度を有する人

【入学後の期待】

入学時に求められる知識・技能、能力、態度をもとに、各学部・学環の専門教育及び教養教育を学修することができるレベルにまで資質・能力を高めることを期待する。

２．入学者選抜の基本方針

各学部・学環の特性に応じて、求めている資質・能力を適切に評価することができる選抜方法により実施する。

全学の「入学者受入れの方針」に加え、学部等の学位プログラム毎にも「入学者受入れの方針」を定め、これに則して入学者を選抜しています。

（参考）各学部の入学者受入れの方針
https://www.wakayama-u.ac.jp/admission/admission-policy/index.html

「入学者受入れの方針」に則した選抜が実施されているかを明らかにするため、入試方法の区分に応じた受験者数、合格者数及び入学者数等を以下に示します。

▸ 受験者数、合格者数、入学者数等について

一般選抜前期日程_実績一覧_学部別

学部・学環	募集人員数	志願者数	志望倍率※1	受験者数	実質倍率※2	合格者数	合格率※3	入学者数	入学率※4
教育学部	90	249	2.8	209	2.3	102	48.8%	96	94.1%
経済学部	170	429	2.5	392	2.3	195	49.7%	168	86.2%
システム工学部	160	444	2.8	404	2.5	183	45.3%	165	90.2%
観光学部	60	151	2.5	128	2.1	65	50.8%	55	84.6%
社会インフォマティクス学環	20	47	2.4	41	2.1	24	58.5%	20	83.3%
合計	**500**	**1,320**	**2.6**	**1,174**	**2.3**	**569**	**48.5%**	**504**	**88.6%**

一般選抜後期日程_実績一覧_学部別

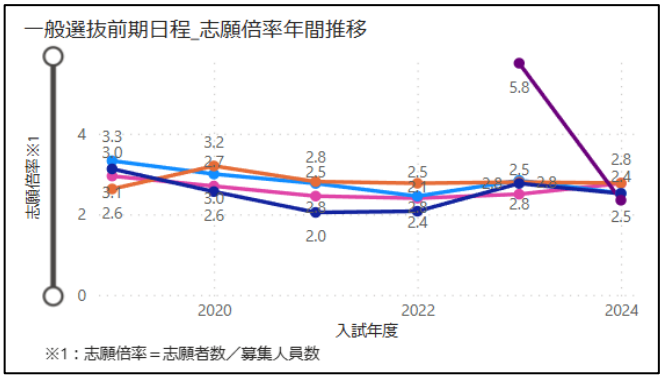
学部・学環	募集人員数	志願者数	志望倍率※1	受験者数	実質倍率※2	合格者数	合格率※3	入学者数	入学率※4
教育学部	25	205	8.2	66	2.6	29	43.9%	24	82.8%
経済学部	80	952	11.9	428	5.4	121	28.3%	95	78.5%
システム工学部	100	651	6.5	271	2.7	150	55.4%	106	70.7%
合計	**205**	**1,808**	**8.8**	**765**	**3.7**	**300**	**39.2%**	**225**	**75.0%**

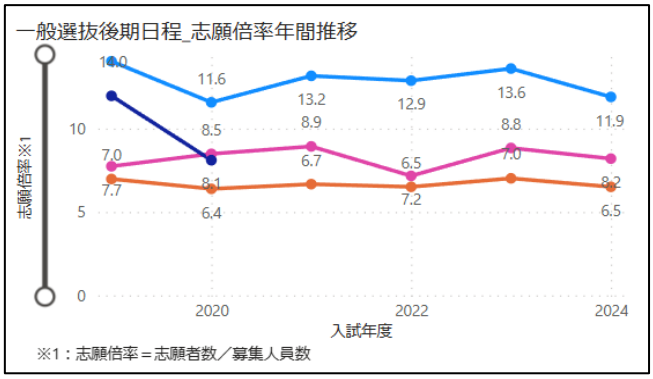
上表の各数値は、属性に該当する実数を表す。
※1：志願倍率＝志願者数／募集人員数
※2：実質倍率＝受験者数／募集人員数
※3：合格率＝合格者数／受験者数×100〔%〕
※4：入学率＝入学者数／合格者数×100〔%〕

＜一般選抜前期日程 志願倍率年間推移＞

＜一般選抜後期日程 志願倍率年間推移＞

学部・学環 ●教育学部 ●経済学部 ●システム工学部 ●観光学部 ●社会インフォマティクス学環

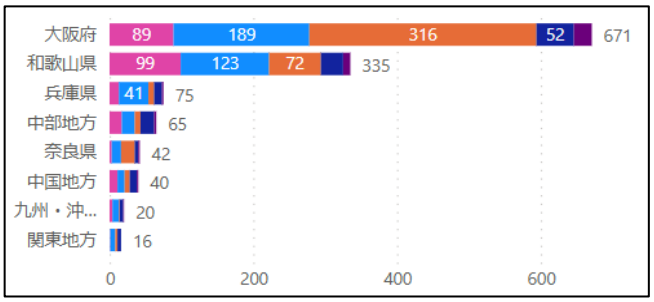


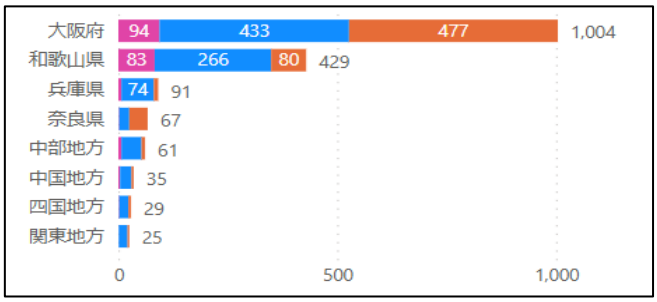


＜一般選抜前期日程 志願者数＞

＜一般選抜後期日程 志願者数＞

学部・学環 ●教育学部 ●経済学部 ●システム工学部 ●観光学部 ●社会インフォマティクス学環





【分析状況】

大学全体の志願状況は、長期的には前期選抜はやや減少傾向にあり、後期選抜はほぼ横ばいか若干の増加傾向にある。この主な原因として少子化や大学入試の早期化が考えられる。また、令和６年度選抜を前年度の選抜と比較すると、一般選抜の前期日程ではいくつかの学部等が、また後期日程ではすべての学部において志願者数が減少している。このような状況下で、志願者・入学者を確保するための対策として、令和５年度も高校におけるガイダンスや進学相談会などへ多数参加し、本学の特色や魅力を発信することに努めた。さらに本学のアドミッション・ポリシーに基づく多様な選抜方法についても広く周知することに注力した。一方、本学が求める資質・能力を適切に評価し、多様な志願者を受け入れる選抜方法の検討も進めた。その結果、令和７年度選抜では、システム工学部の推薦型選抜(女子枠)を新設することとなった。

入試広報と入試制度の検討を引き続き行っていく必要がある。まず和歌山県と大阪府からの志願者の割合が多く、これらの地域の高校生には本学がよく認知されていると考えられる。一方、大阪府と和歌山県からの志願者数の比率は学部等により差が大きい。その原因を特定することで、これらの地域からより多くの志願者を得るための対策を講じる必要がある。大阪府・和歌山県以外からの志願者を得るには、本学の特色・魅力が広く認知されることが重要であると考えられる。本学の特色・魅力を広く発信するための広報戦略を練ることが重要である。

＜各学部等からの分析結果＞

学部等	分析コメント
教育学部	e-annual reportのデータより分析した結果、前期・後期とも和歌山県と大阪府からの志願者がほぼ半々である。地域における教員養成を担う学部として教員採用率及び小学校教員占有率の向上を目指し2016年度、2023年度入学者より推薦入試において地域枠（2016年度「地域【紀南】」、2023年度「きのくに教員」）を導入した。 一般入試選抜においてもより一層の志願者増加のために、新カリキュラムのアクションタームなどの特色を入試広報等により広く丁寧に説明していく。
経済学部	志願倍率では、一般選抜の後期日程が最も高く、概ね 12 倍～14 倍の中で推移している。志願倍率の傾向としては上昇傾向にある。前期日程では、概ね 2 倍～3 倍の中で推移しているが、傾向としては低下傾向ではある。しかし、国立大学全体で見ても、前期日程の志願倍率は同期間で低下傾向にあり、後期日程は概ね上昇傾向にあり、本学と同様の傾向となっている。 ちなみに、2024 年度は、多くの選抜において、志願倍率は前年度と比べて低下している。しかし、それらの選抜では前年度（2023 年度）に志願倍率が上昇していたので、揺り戻し効果の可能性もあり、今後の動向を注視する必要がある。
システム工学部	シス工後期日程の入学率は、中期日程の併願の影響をうけて、他学部に比べ低い傾向である。シス工の場合、前期日程、後期日程ともに志願倍率の推移に大きな変化は見られない。地域別の志願状況をみると、シス工では、大阪府からの志願者が多く、和歌山県内からは少ないことがわかる。これは、和歌山県内の高校において、理系クラスが少ないことが原因の一つと考える。加えて、大阪府南部の地域の高校に通う高校生からみて、シス工が自宅から通える国立大工学系学部として認知され

	ていることが伺える。 　受験者数、合格者数、入学者数等および地域別志願者数の表について、男女別の数字がわかると、地域別男女比や男女別合格率など、また違った分析が行えると考える。
観光学部	コロナ禍に見舞われた 2020～2022 年度にかけて減少した前期日程の志願者数・実質倍率は 2023 年には回復し、2024 年は前年よりは若干下がっているものの、同程度の水準を維持している。コロナ禍が落ち着きを見せる中で、観光関連産業に対する社会の認識の変化が一定程度反映されていると考えられる。次年度入試より後期日程が再開するので、志願者数などの動向を注視しつつ入試広報や選抜方法の改善を適宜進めていきたい。
社会インフォマティクス学環	令和 5 年度、新設による高い志願倍率の反動で減少したと考えられる。引き続き、説明会の開催や、県内外の高等学校の訪問など、積極的な広報活動を実施していきたい。

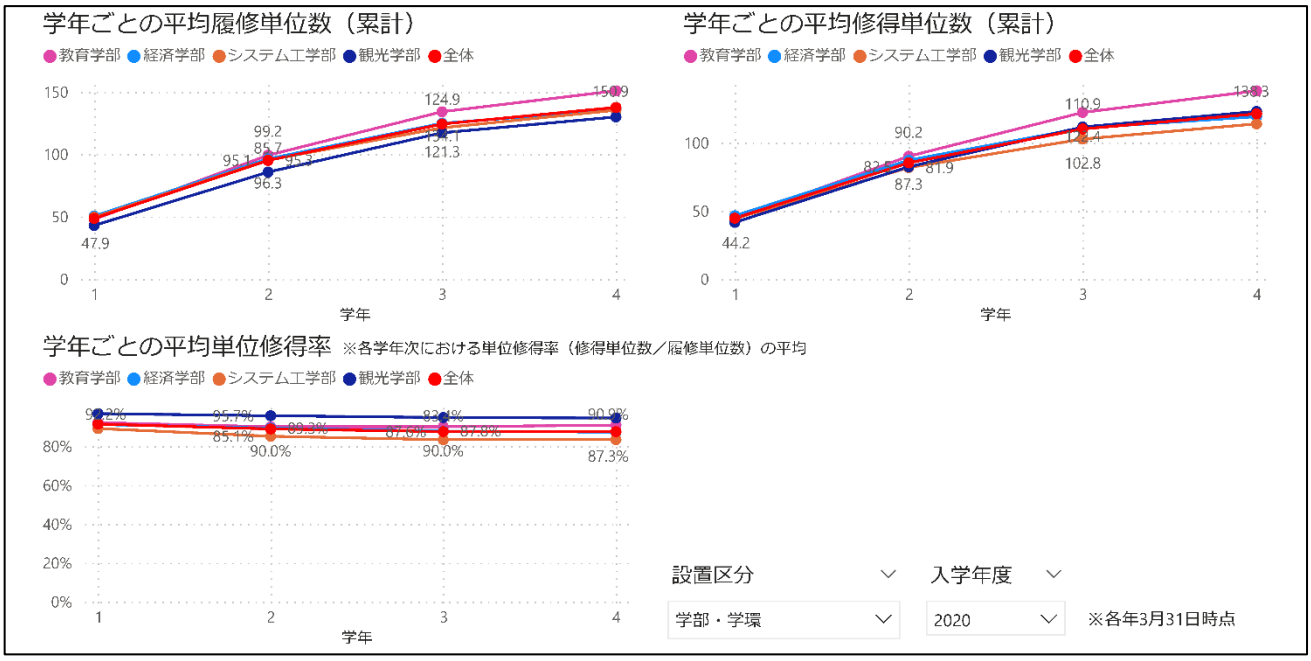
３．在学中の情報

３－１　各授業科目における到達目標の達成状況

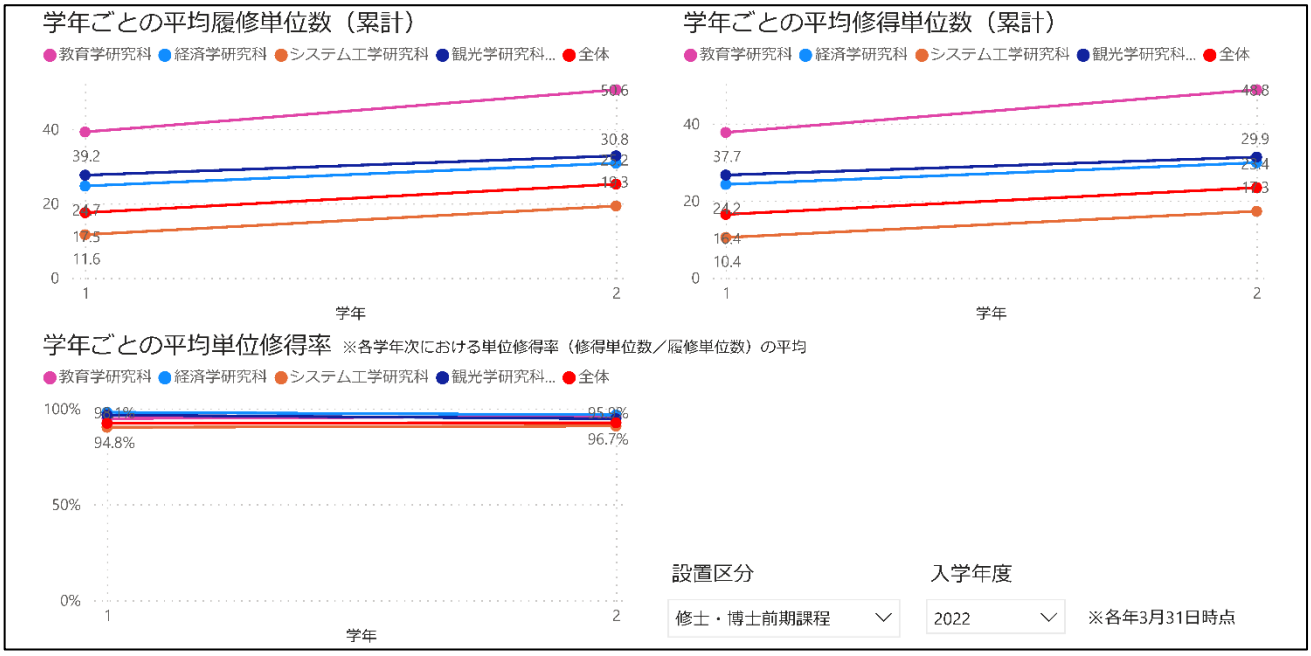
学生が、個々の授業科目の履修の結果として「卒業認定・学位授与の方針」に定められた資質・能力を獲得してゆく過程の全体的な状況を明らかにするため、入学年度別・年度毎の単位修得状況等を以下に示します。

▸ **入学年度別・年度毎の平均履修（修得）単位数について**

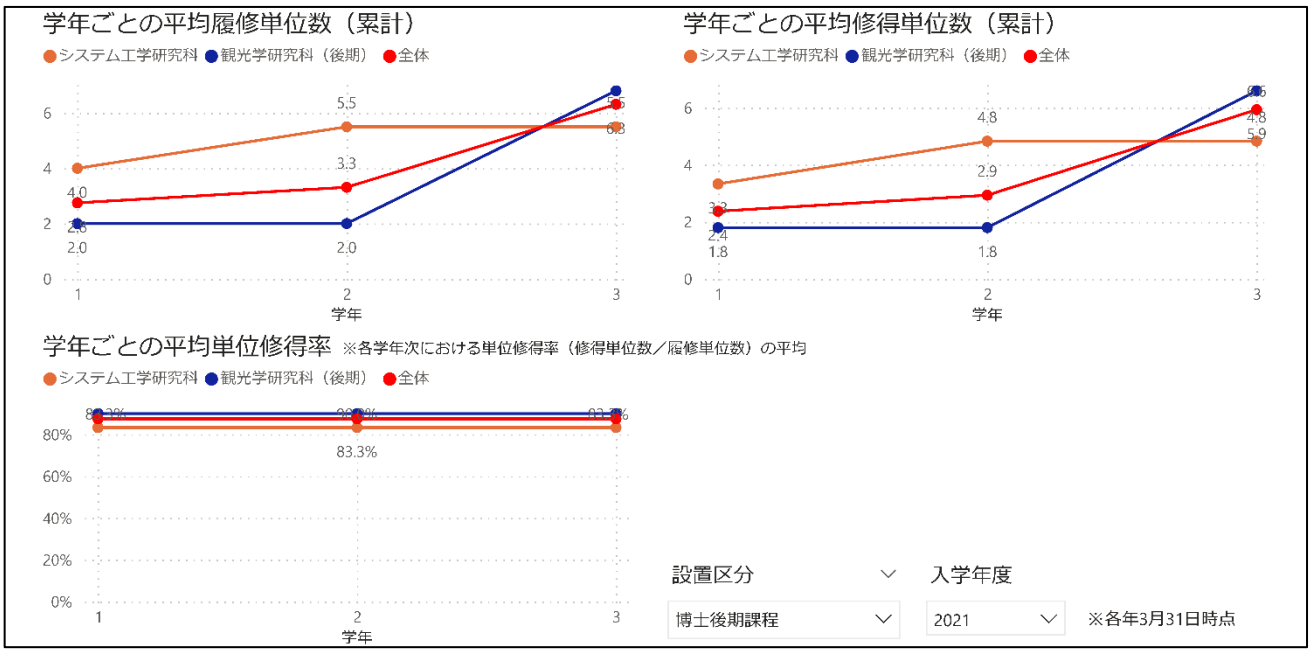
＜学部＞



＜修士・博士前期課程＞



＜博士後期課程＞



【分析状況】

学部については、CAP 制の導入等によって平均履修単位数が減少傾向にあるものの、２年次以降、平均単位修得率が 90%を下回る学部が存在するなど、平均履修単位修得率も若干の低下傾向にある。すべての学部において、1 単位あたりの学修時間を確保した単位の実質化を図っていくために、各学部において学生の単位修得数や修得率の分布、授業科目毎の単位修得率等を検討し、学生の平均単位修得率の実態をより詳細に調査し、授業の履修等に問題を抱える学生がいないかを確認すると共に、学生が卒業に向けて単位を適切に修得していくためにカリキュラムや授業のデザインに問題がないか等を確認することが求められる。

研究科については、各研究科のカリキュラムに応じた履修を学生は行なっており、昨年度と大きく変わっている点はなく、学生の単位修得数と単位修得率は概ね良好である。ただし、各研究科のカリキュラムが修士論文や博士論文の提出につながっているのかについては、引き続き検討をしていきたい。

＜各学部等からの分析結果＞

学部等	分析コメント
教育学部	e-annual report のデータより分析した結果、他の 3 学部と比べて平均履修単位・平均修得単位とも高い傾向にある。ＣＡＰ制があるが卒業要件としての免許状取得単位に加え、卒業後の就職（主に教員）を見通すなかで目標を明確に定めつつ副免取得の単位を取得する傾向があり上記の結果につながったと考えられる。今後は単に単位取得のみを目指すのではなく学習内容をより深く理解するよう指導を行いたい。

経済学部	平均単位修得率は、異なる入学年度の同一学年で比較してもほとんど変化が見られない（例．2 回生：2019 年度入学：88.7%、2020 年度入学：89.3%、2021 年度入学：87.8%、2022 年度入学：86.1%）。したがって、カリキュラムが継続して適正に実施されていると考えられる。 年次を問わず履修登録単位数の上限が同一であるキャップ制を導入している。すべての年次で 40 単位程度修得できている（平均単位修得率がほぼ一定である）ことから、現行のキャップ制のもとで、卒業に必要な単位数に到達することは十分に可能である。
システム工学部	システム工学部では平均単位修得率が 90%を下回っているが、これが必ずしも学部全体の質や学習意欲の低下を示すものではないと考えている。工学部は実験や実習が多いため、座学だけでなく、実際の実技を要求される場面も多い。そのため、単位修得率が少し低くても、学生が実践的な能力や技術を身につけている。具体的には、実習や演習の単位修得状況は、講義の単位修得状況に比べて高い。 平均単位取得率は 89%から徐々に減少し、4 年次には 83.4%となっているが、大きな変化は見られず各学年におけるカリキュラム構成には問題がないと考えている。なお、単位修得率は、個人によって大きなばらつきがあるため、単純に平均単位修得率だけでは分析に限界があると考えられる。今後は、単位修得率の低い層の学生を抽出し、学位修得率との関連性を調査する必要があると考えている。
観光学部	やや厳しめに CAP（履修単位数の上限）を設定しており、他学部と比べ学年ごとの平均履修単位数は少々低い水準にある。一方で、平均修得単位数は同等の水準となっており、平均単位修得率は他学部と比較してやや高い水準にある。選択したコースや自身の関心等に応じて堅実に科目を履修する学生が多いと考えられる。また、依然として卒業に必要な単位数までしか履修・修得しない学生も多く、GPA への影響を心配する学生の声も聞かれることから、目先の GPA よりも、自らの知的関心に応じて科目履修に積極的にチャレンジできる方策を引き続き検討していく必要がある。
教育学研究科	e-annual report のデータより分析した結果、教職実践力を獲得するという学習の目標が明確であるため集中して単位取得に向かうことが出来たと考えられる。さらに約半数が現職教員（県派遣等）であり現任校での課題が明確で、それに対する解決策を導き出すため自律的かつ積極的に学習に取り組んだものと分析した。加えてカリキュラム上、現職とストレートマスターとの共同の学びが多く設定されており相互に学びを高め合う仕組みがあったことも単位取得につながったと考えられる。今後も高い平均履修単位・平均修得単位を維持するよう引き続き取り組みを進めていきたい。

経済学研究科	修士課程の学習スタイルが、1 年次に専門科目を履修しながら研究をすすめ、2 年次には研究を深めた上で修士論文を執筆するものであることを踏まえると、平均修得単位数を見る限り、多くの学生が 1 年次に専門科目の単位を修得しており、1 年次における専門科目の学習は順調に行われていると考えられる。 平均単位修得率は、2022 年度入学と 2023 年度入学の 1 年次を比較すると、わずかに低下している。継続的に学習者の積極的な学びの姿勢を養い、単位修得をスムーズに行いうる環境の維持に引き続き努める。
システム工学研究科	ほとんどの学生が適切に履修計画を組んでいるため、単位修得率も高いことがわかる。また、研究科においては、学部のカリキュラムとは大きく異なるアプローチが採られている。具体的には、主要な講義科目に関しての単位は、1 年次の終わりまでにほとんどの学生が修了しているのが特徴である。これにより、2 年次に入ると、修士論文の研究に大きく重みが移るため、取得単位数はあまり増加していない。
観光学研究科	博士前期課程・後期課程とも、授業科目の年次配当どおりの履修（修得）単位数となっており、単位数の面において学位取得の条件を満たす学修ができている。今後予定されるカリキュラム改善にあわせて、学生の動向を注視していく必要がある。

３－２　各授業科目における到達目標の達成状況（授業科目に関する情報）

学生が単位を修得した各授業科目における到達目標の達成状況について、当該科目の到達目標、到達目標と「卒業認定・学位授与の方針」との対応関係、成績評価基準及び成績評価手法などを公表することが望ましいとされています。

本学では、これらの情報をシラバスへ記載し学生へ周知するとともに、各学期の授業評価アンケートで実施状況の確認を行っています。

・授業評価アンケート対象科目数及び回答者数について

アンケート対象科目数

開講所属	対象科目数
教養・連携	334
教育学部	228
経済学部	215
システム工学部	305
観光学部	110
社会インフォマティクス学環	7
全体（学部及び学環）	1,199

開講所属	対象科目数
教育学研究科	19
経済学研究科	29
システム工学研究科_博士前期課程	65
観光学研究科_専門職課程	8
全体（大学院）	121

延べ回答数_学生所属別

学生所属	延べ回答数
教育学部	3,073
経済学部	4,872
システム工学部	8,638
観光学部	1,923
社会インフォマティクス学環	696
全体（学部及び学環）	19,202

学生所属	延べ回答数
教育学研究科	364
経済学研究科	145
システム工学研究科_博士前期課程	517
観光学研究科_博士前期課程	2
観光学研究科_専門職課程	10
全体（大学院）	1,038

・教養教育科目・連携展開科目

年度
◉ 2023
○ 2022

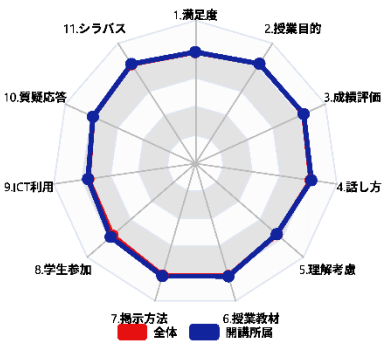
開講所属※
○ 全体
◉ 教養・連携
○ 教育学部
○ 経済学部
○ システム工学部
○ 観光学部

※学部の集計結果を 公表する。（社会インフォマティクス学環を除く。）
評価区分：最高評価を「5」、最低評価を「1」

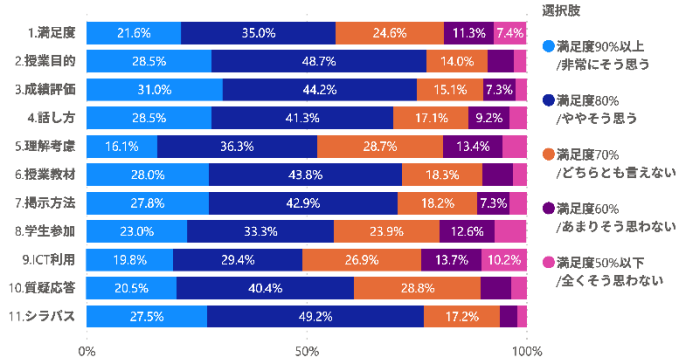
集計結果

	設問内容	評価平均	満足度との相関係数	全体の評価平均
1	この授業の満足度を評価してください	4.1	1.00	4.1
2	授業の目的は明確でしたか	4.3	0.73	4.3
3	成績評価の観点・方法などがきちんと説明されていましたか	4.3	0.58	4.3
4	授業者はよく聞き取れる話し方でしたか	4.3	0.69	4.3
5	教員は学習の理解度を把握しながら進めていましたか	3.9	0.72	3.9
6	授業で使用される教材（テキスト、資料等）や設備・機器は適切に使用されていましたか	4.3	0.62	4.3
7	授業の提示方法（板書、ビデオ等）は適切でしたか	4.3	0.62	4.2
8	学生参加の機会は十分にありましたか	4.1	0.49	4.0
9	ICTの利活用を進めるような授業構成でしたか	4.0	0.36	3.9
10	学生の質問に対する教員の回答は明快でしたか	4.1	0.66	4.1
11	この授業はシラバスの内容に則した授業でありましたか。【2023年度前期より調査】	4.3	0.59	4.3

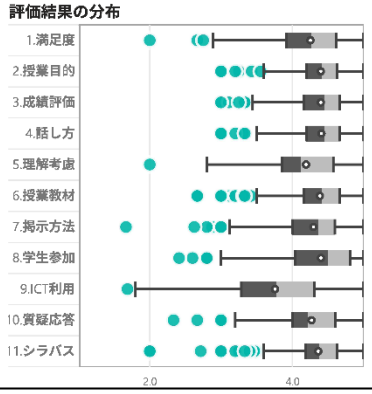
集計結果の比較



集計結果内訳



評価結果の分布



・教育学部

年度
◉ 2023
○ 2022

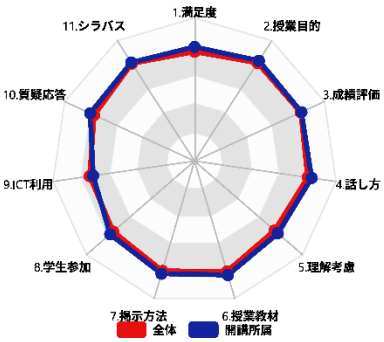
開講所属※
○ 全体
○ 教養・連携
◉ 教育学部
○ 経済学部
○ システム工学部
○ 観光学部

※学部の集計結果を 公表する。（社会インフォマティクス学環を除く。）
評価区分：最高評価を「5」、最低評価を「1」

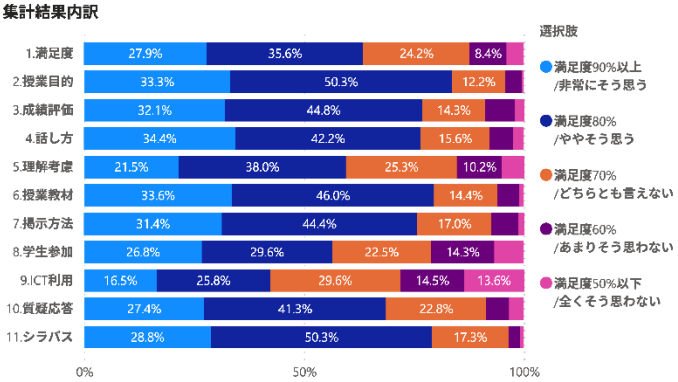
集計結果

	設問内容	評価平均	満足度との相関係数	全体の評価平均
1	この授業の満足度を評価してください	4.2	1.00	4.1
2	授業の目的は明確でしたか	4.4	0.63	4.3
3	成績評価の観点・方法などがきちんと説明されていましたか	4.4	0.56	4.3
4	授業者はよく聞き取れる話し方でしたか	4.4	0.72	4.3
5	教員は学習の理解度を把握しながら進めていましたか	4.1	0.70	3.9
6	授業で使用される教材（テキスト、資料等）や設備・機器は適切に使用されていましたか	4.4	0.56	4.3
7	授業の提示方法（板書、ビデオ等）は適切でしたか	4.4	0.57	4.2
8	学生参加の機会は十分にありましたか	4.1	0.55	4.0
9	ICTの利活用を進めるような授業構成でしたか	3.8	0.31	3.9
10	学生の質問に対する教員の回答は明快でしたか	4.3	0.69	4.1
11	この授業はシラバスの内容に則した授業でありましたか。【2023年度前期より調査】	4.4	0.62	4.3

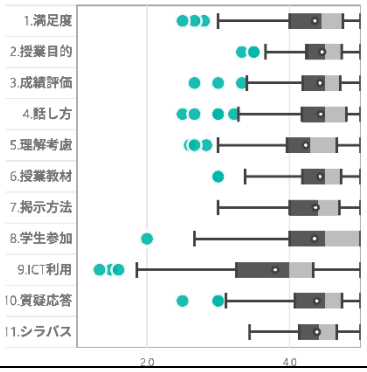
集計結果の比較



集計結果内訳



評価結果の分布



・経済学部

年度
◉ 2023
○ 2022

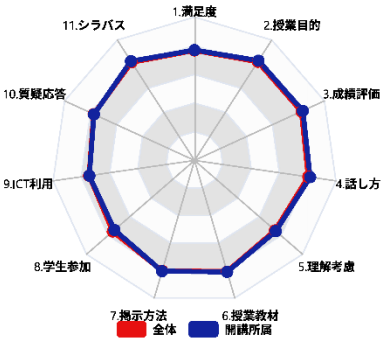
開講所属※
○ 全体
○ 教養・連携
○ 教育学部
◉ 経済学部
○ システム工学部
○ 観光学部

※学部の集計結果を 公表する。（社会インフォマティクス学環を除く。）
評価区分：最高評価を「5」、最低評価を「1」

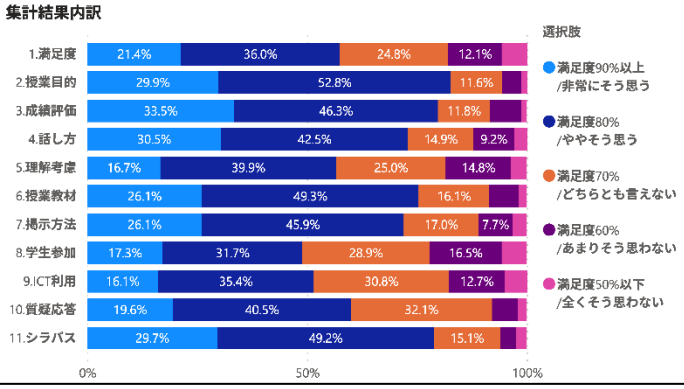
集計結果

	設問内容	評価平均	満足度との相関係数	全体の評価平均
1	この授業の満足度を評価してください	4.1	1.00	4.1
2	授業の目的は明確でしたか	4.4	0.71	4.3
3	成績評価の観点・方法などがきちんと説明されていましたか	4.4	0.48	4.3
4	授業者はよく聞き取れる話し方でしたか	4.3	0.74	4.3
5	教員は学習の理解度を把握しながら進めていましたか	4.0	0.58	3.9
6	授業で使用される教材（テキスト、資料等）や設備・機器は適切に使用されていましたか	4.3	0.63	4.3
7	授業の提示方法（板書、ビデオ等）は適切でしたか	4.3	0.61	4.2
8	学生参加の機会は十分にありましたか	3.9	0.28	4.0
9	ICTの利活用を進めるような授業構成でしたか	3.9	0.46	3.9
10	学生の質問に対する教員の回答は明快でしたか	4.1	0.68	4.1
11	この授業はシラバスの内容に則した授業でありましたか。【2023年度前期より調査】	4.4	0.42	4.3

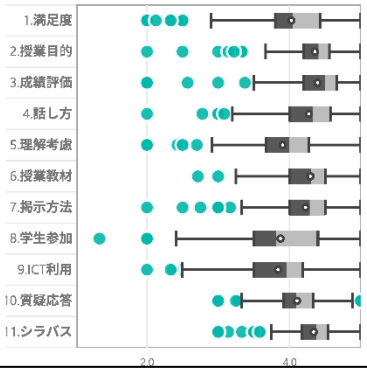
集計結果の比較



集計結果内訳



評価結果の分布



・システム工学部

年度
◉ 2023
○ 2022

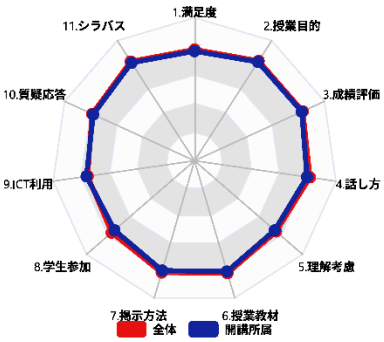
開講所属※
○ 全体
○ 教養・連携
○ 教育学部
○ 経済学部
◉ システム工学部
○ 観光学部

※学部の集計結果を 公表する。（社会インフォマティクス学環を除く。）
評価区分：最高評価を「5」、最低評価を「1」

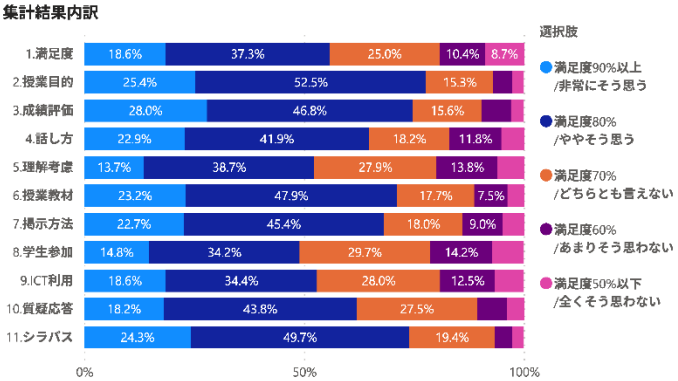
集計結果

	設問内容	評価平均	満足度との相関係数	全体の評価平均
1	この授業の満足度を評価してください	4.0	1.00	4.1
2	授業の目的は明確でしたか	4.3	0.74	4.3
3	成績評価の観点・方法などがきちんと説明されていましたか	4.3	0.48	4.3
4	授業者はよく聞き取れる話し方でしたか	4.1	0.73	4.3
5	教員は学習の理解度を把握しながら進めていましたか	3.9	0.79	3.9
6	授業で使用される教材（テキスト、資料等）や設備・機器は適切に使用されていましたか	4.2	0.73	4.3
7	授業の提示方法（板書、ビデオ等）は適切でしたか	4.2	0.75	4.2
8	学生参加の機会は十分にありましたか	3.9	0.54	4.0
9	ICTの利活用を進めるような授業構成でしたか	4.0	0.44	3.9
10	学生の質問に対する教員の回答は明快でしたか	4.1	0.72	4.1
11	この授業はシラバスの内容に則した授業でありましたか。【2023年度前期より調査】	4.2	0.61	4.3

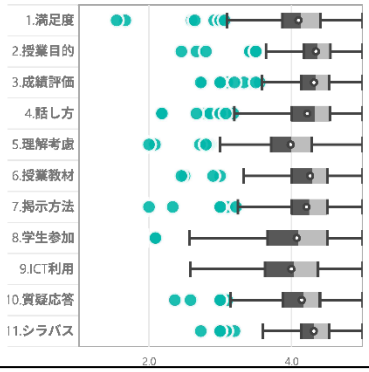
集計結果の比較



集計結果内訳



評価結果の分布



・観光学部

年度
◉ 2023
○ 2022

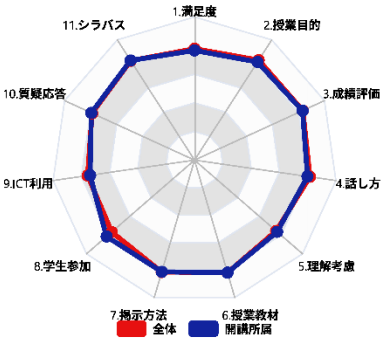
開講所属※
○ 全体
○ 教養・連携
○ 教育学部
○ 経済学部
○ システム工学部
◉ 観光学部

※学部の集計結果を 公表する。（社会インフォマティクス学環を除く。）
評価区分：最高評価を「5」、最低評価を「1」

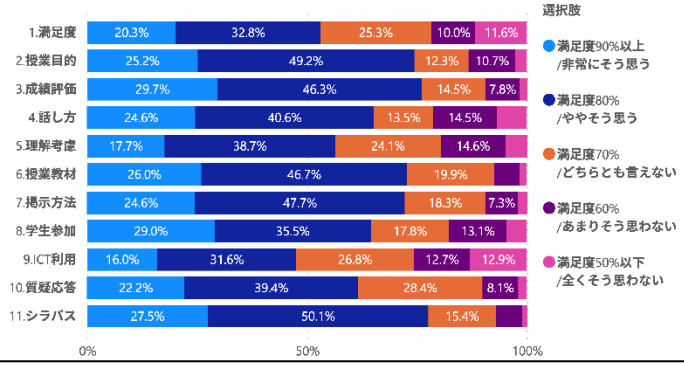
集計結果

	設問内容	評価平均	満足度との相関係数	全体の評価平均
1	この授業の満足度を評価してください	4.0	1.00	4.1
2	授業の目的は明確でしたか	4.2	0.81	4.3
3	成績評価の観点・方法などがきちんと説明されていましたか	4.3	0.57	4.3
4	授業者はよく聞き取れる話し方でしたか	4.2	0.75	4.3
5	教員は学習の理解度を把握しながら進めていましたか	4.0	0.77	3.9
6	授業で使用される教材（テキスト、資料等）や設備・機器は適切に使用されていましたか	4.3	0.73	4.3
7	授業の提示方法（板書、ビデオ等）は適切でしたか	4.2	0.73	4.2
8	学生参加の機会は十分にありましたか	4.2	0.66	4.0
9	ICTの利活用を進めるような授業構成でしたか	3.8	0.44	3.9
10	学生の質問に対する教員の回答は明快でしたか	4.1	0.73	4.1
11	この授業はシラバスの内容に則した授業でありましたか。【2023年度前期より調査】	4.3	0.76	4.3

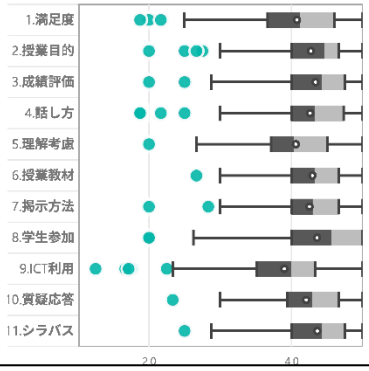
集計結果の比較



集計結果内訳



評価結果の分布



【分析状況】

授業アンケートの結果は、概ね良好であるが、項目に則して分析すると、例えば全学部において授業の中での「ICT の利活用」の点で各授業の相違が大きいことが分かる。また、システム工学部と経済学部では学生の参加にも課題があることが見受けられる。満足度との相関関係からは、授業の目的の明確化や授業者の話し方、学生への質問への回答が、授業改善の指標として挙がってきたため、今後の FD 研修などで、その結果を利用し、授業改善をさらに進めていきたい。

＜各学部等からの分析結果＞

学部等	分析コメント
教育学部	e-annual report のデータより分析した結果、到達目標の達成状況の 10 項目のうち、9 項目が平均を上回っているが、平均に達していない項目として、「8. ICT の利活用を進めるような授業構成でしたか」があった。教育学部の場合、科目の特性として ICT 利用が必ずしもそぐわない科目もあることが要因として考えられるが、今後は積極的に ICT を活用するよう促したい。
経済学部	授業目的の明確さと授業者の聞き取りやすさは、特に授業満足度との相関が高く、学習者の講義内容の理解に繋がる基本的要件は満たされていると考えられる。 一方、学生参加の機会については評価平均および授業満足度の相関は低いことが示されている。アクティブ・ラーニング型講義の充実に加え、授業満足度に繋がる工夫についてアクティブ・ラーニングを重点的に行っている教員間で共有することが必要だといえる。
システム工学部	ほとんどの評価項目において評価は 4 以上あり、講義に関する評価は高いと考えている。但し、「教員は学習の理解度を把握しながら進めていましたか」と「学生参加の機会は十分にありましたか」の項目に関して 50%程度の学生しか、その通りであると思っていない。 学習の理解度の把握に関しては、講義中に複数回の小テストを課す科目を増やすなど工夫が必要であるかもしれない。 学生参加の機会に関しては、システム工学部における講義は、基本的な知識や技術を体系的に学ぶ講義が多いため、このような結果になったと考えられる。ICT の利用に関しては、評価結果の分布をみるとばらつきが大きいことがわかる。授業によって、ICT の利用のしやすい授業としにくい授業もあるため、このような結果になったと考えられる。
観光学部	授業評価アンケートの結果は概ね全体と同様の傾向を示している。その中でも、学生参加の機会に対する評価が高めとなっており、グループワークやフィールドワーク等を積極的に導入する科目や、そうした機会に意欲的に取り組む学生が多いことが影響していると考えられる。

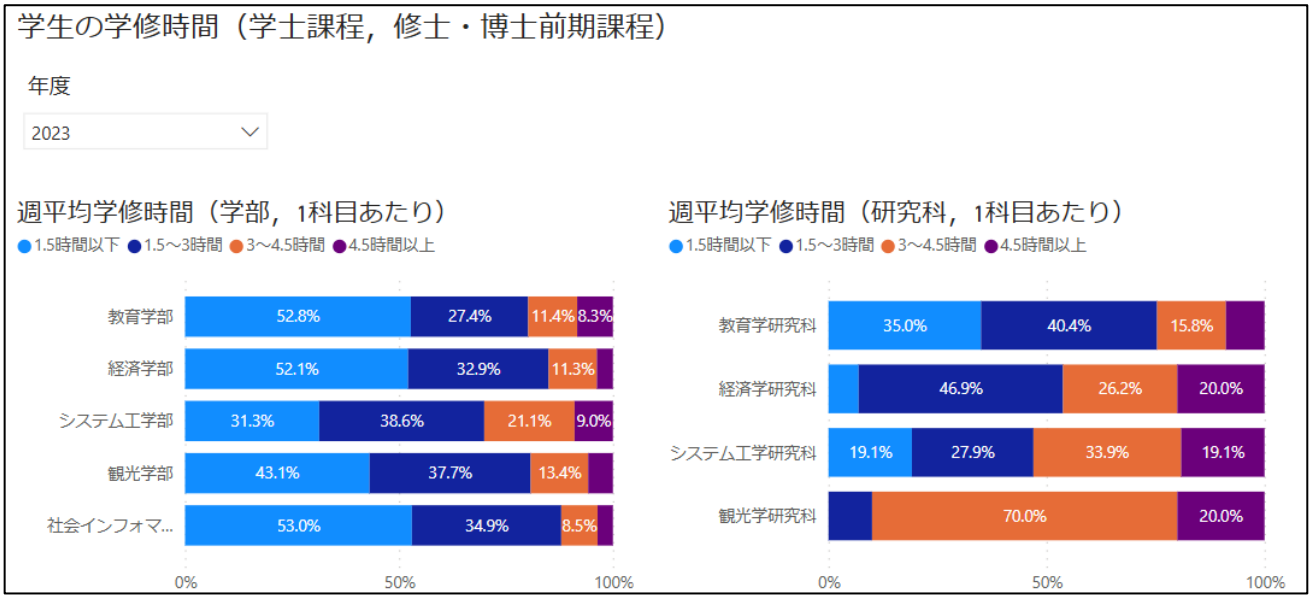
３－３　学修時間

学生が、学位プログラムが期待する水準の資質・能力を身に付けるための一般的な前提条件を満たしているかを明らかにするため、学生が授業内及び授業外で取り組む学修の平均時間を以下に示します。

▸ **学修に費やした時間の平均値及び分布について**

・各学期に実施されている授業評価アンケートより

「この授業に関する通常授業期間の学修時間（授業時間を除く、１週間あたりの平均）」について



・令和５年度前期・後期　授業評価アンケート「授業に関する通常授業期間の学修時間について」より集計

【分析状況】

教育学部と経済学部の両学部は、１科目あたりの学修時間が 1.5 時間以下の学生が 50%を超えており、かつ昨年度よりもその割合が増加しているため、何らかの改善の手立てを行う必要がある。システム工学部は 37.9%から 31.3%、観光学部は 48.0%から 43.1%に、その割合が減少しており、学修時間の確保の取り組みの成果が反映されている。今後も、１単位時間の実質化を図るため、Moodle や Teams などの学修支援システムを活用すること、予習復習を組み込んだ授業構成やカリキュラム構成を大学全体で保証する等の FD を実施していく必要がある。来年度からは学生の Moodle のアクセス数などのデータの収集も可能となるため、さらに深く学生の学修時間を分析していきたい。

研究科については、教育学研究科の学生の学修時間が少ない傾向があるため、分析が必要と考えている。

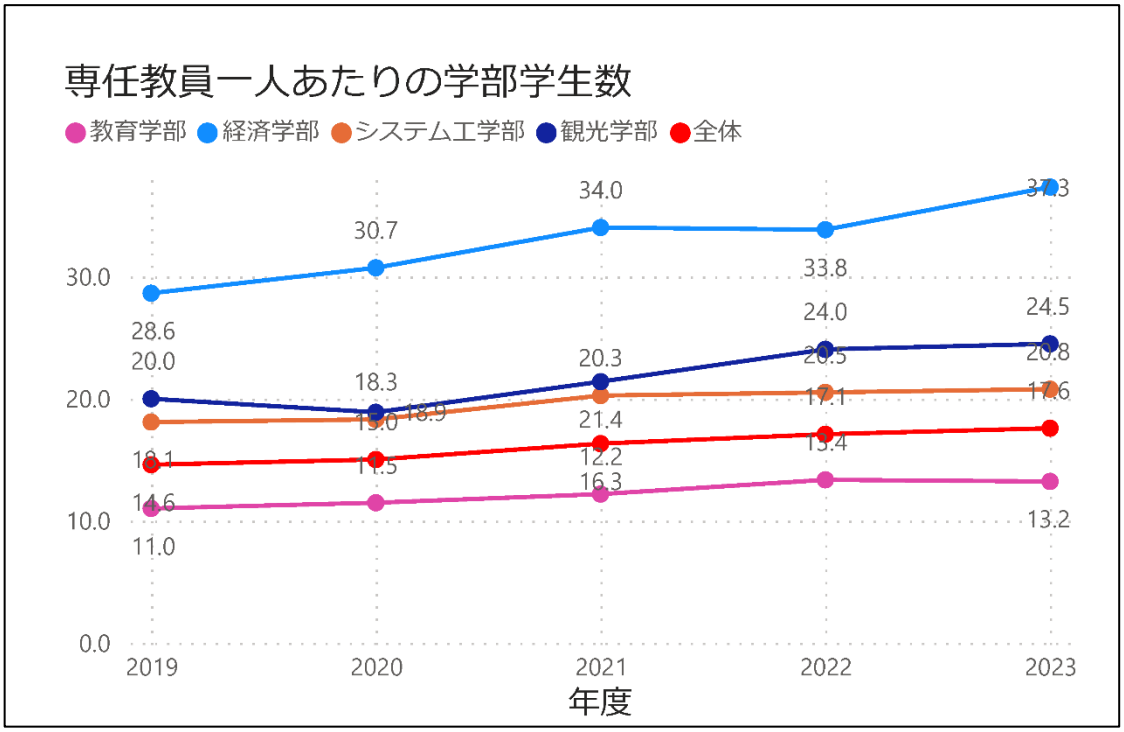
＜各学部等からの分析結果＞

学部等	分析コメント
教育学部	e-annual report のデータより分析した結果、教育実習など座学以外の実践的な学修活動が多く、回答として他学部に比べ学修時間がやや少なくなったものと考えられる。今後は年度始めの学年全体ガイダンスや初回授業でのオリエンテーション等、さらにゼミ活動において大学設置基準に示されている適切な学修時間の確保に努めるよう学部教員による指導を徹底する。
経済学部	2023 年度の週平均学修時間について、1.5 時間以下が 52.1%、3～4.5 時間が 11.3%、4.5 時間以上が 3.7%となっている。1 科目当たり週 3 時間（以上）の基準を満たすのが 15.0%にとどまっている。1.5 時間以上の学修時間が 2023 年度は減少しているため学習支援システムを活用し、時間外学習の増加を図りたい。
システム工学部	平均的に 1 科目あたりで週 2 時間程度の学習（授業時間を除く）が行われている。この時間だけでなく、試験勉強（多くの講義では単位認定試験を実施）などの時間も考慮に入れると、1 単位におおよそ 45 時間相当の学修を行っていると考えることもできるが、CAP 制の主旨からは平均的に毎週の学修時間を確保させることが望まれる。今後は、1.5 時間以下、1.5～3 時間の学生の学修時間を増やす工夫をするとともに、過度に時間がかかっている学生への対応も必要であると考えている。
観光学部	1 科目あたり週平均学修時間について、1.5 時間以下の学生の割合は前年度よりも 5%程度減少し 43.1%となった。ただし、3 時間以上の学修時間を確保している学生は依然として 2 割弱に留まっており、引き続き学修時間の確保について意識づけを高めていく必要がある。
社会インフォマティクス学環	新設年度であり、分析対象は 1 年生に限定され、専門科目は比較的少ない。約半数が 1.5 時間以上の学修時間を確保しているが、他学部に比べて 3 時間以上確保している学生は少ない。今後も、学期ごとに開催するガイダンスや導入教育の機会を通じて、自学自習の管理を徹底するよう指導に努める。
教育学研究科	e-annual report のデータより分析した結果、インターシップ等の実践科目は、いわゆる「授業（＝座学)」に含めないとの回答者による理解不足が影響し、その結果、回答において学修時間が少なくなった可能性も否定できない。今後は学部における課題と同様に大学設置基準に照らし適切に指導を行う。

経済学研究科	2023 年度の週平均学修時間について、1.5 時間以下が 6.9%、3 時間以上が 46.2%となっている。昨年度と比較して、1.5 時間以下の割合は変化がないが、3 時間以上の割合はやや低くなっている。単年度での変化ではあるが、この点に注視する必要がある。
システム工学研究科	平均的に 1 科目あたり 3 時間程度は学習していることがわかった。比較的よく学習しているように思われる。システム工学研究科は、学部と異なり、学修が研究主体となるため、実際に研究に費やしている時間の調査・分析を行う必要があると考えている。
観光学研究科	およそ 9 割の学生が 1 科目あたり 3 時間以上の週平均学修時間を確保しており、学修時間の観点では十分な水準にあると考えられる。

３－４　教員一人あたりの学生数

学生数に対して十分な教員を確保することで、密度の濃い授業や丁寧な履修指導が可能な環境であることを明らかにするため、学生数に対して十分な教員を確保していることを以下に示します。



４．卒業時･卒業後の情報

４－１　学位の取得状況

学生が、個々の授業科目の履修の結果として、「卒業認定・学位授与の方針」に定める資質・能力を備えていることを明らかにするため、学生が取得した学位に関する情報を以下に示します。

▸ **学位の名称と授与者の数について**

・年度ごとの学位取得者数（各年 3 月 31 日時点）

＜学部＞

学位	2019	2020	2021	2022	2023
学士（教育学）	165	170	164	167	164
学士（経済学）	321	325	324	319	307
学士（工学）	299	306	327	312	296
学士（観光学）	110	120	128	105	135
合計	**895**	**921**	**943**	**903**	**902**

＜修士・博士前期課程＞

学位	2019	2020	2021	2022	2023
教職修士（専門職）	17	19	24	18	19
修士（経済学）	19	35	36	38	36
修士（工学）	125	127	120	136	130
修士（観光学）	8	12	10	11	11
合計	**169**	**193**	**190**	**203**	**196**

＜博士後期課程＞

学位	2019	2020	2021	2022	2023
博士（工学）	5	6	5	2	1
博士（観光学）	2	6	6	2	1
合計	**7**	**12**	**11**	**4**	**2**

【分析状況】

概ね、入学者の数と同等の卒業者が出ているので順調と考えられる。観光学部の 2022 年度卒が少ないのは、コロナ禍の影響を最も大きく受けた学年の学生であり、海外留学等の機会を逃した学生が意識的に卒業を延期している事例もあることから、これらが影響していると推測される。この影響を受け、2023 年度の観光学部の卒業者数が増えている。また 2023 年度のシステム工学部の卒業生が、やや少ないが、定員 305 名に対する卒業率は 97%のため大きな問題ではないと考える。今後も、経済状況を勘案しつつ学生へのキャリア支援を実施していく必要がある。また、過年度生への指導・支援体制についても各学部・研究科への点検を依頼していく。

＜各学部等からの分析結果＞

学部等	分析コメント
教育学部	e-annual report のデータより分析した結果、入学定員に鑑み年度ごとの僅かな増減はあるものの妥当な数字であると考えられる。
経済学部	2019 年度から 2023 年度の間の学位取得者の総数は 1,596 名である。この間に学位取得の見込みがある者は、主に 2016 年度から 2020 年度の入学者（各年度、318 名、326 名、324 名、323 名、304 名）で、その総数は 1,595 名である。この中には 2023 年度までに学位を取得できなかった者の人数が含まれ、学位取得者数には、2015 年度以前の入学者が含まれているが、全体としてみれば、入学者とほぼ同数の学位を授与しているとみなせる。
システム工学部	学位取得数よりも学位取得率が重要である。 5 年間の卒業者の割合を見ると毎年 80%程度であり、学士の育成が一定のレベルで継続して行われていると考えられる。 一方で、学位の質が確保できているかを分析する必要がある。
観光学部	従来から学位取得者数は年度ごとに増減があり、主な要因として、海外留学等を理由に休学する学生の存在があげられる。2022 年度の卒業生はコロナ禍の影響等で減少幅が特に大きくなっており、その反動から、2023 年度は学位取得者数が大幅に増えたものと考えられる。
教育学研究科	e-annual report のデータより分析した結果、入学者数に鑑み年度ごとの僅かな増減はあるものの妥当な数字であると考えられる。
経済学研究科	2019 年度から 2023 年度の間の学位取得者の総数は 174 名である。この間に学位取得の見込みがある者は、主に 2018 年度から 2022 年度の入学者（各年度、24 名、33 名、38 名、44 名、36 名）で、その総数は 175 名である。この中には 2023 年度までに学位を取得できなかった者の人数が含まれ、学位取得者数には、2017 年度以前の入学者が含まれているが、全体としてみれば、入学者とほぼ同数の学位を授与しているとみなせる。

システム工学研究科	学位取得数よりも学位取得率が重要である。 前期：5 年間の学位取得数の変動が小さく、研究者育成が一定のレベルで継続して行われていると考えられる。毎年、学位を取得できない学生が一部いるが、そのようなケースは、学生自身に問題があることも一因として考えられ、早い段階でケアが必要な学生を発見するような体制が必要だと考えられる。 後期：5 年間の学位取得数の変動が大きく、研究者育成の取り組みにおいて、さらなる安定性や向上を目指す必要がある。後期課程に関しては、定員充足できていない。社会情勢の影響もあるが、後期課程進学が魅力あるものに見えるような工夫が必要だと考えられる。
観光学研究科	博士前期課程の学位取得者数は平準化されているが、博士後期課程については年度ごとのばらつきが大きい。後期課程の学位取得者数を安定的に確保するための方策を進めているところであり、今後の動向を注視していく必要がある。

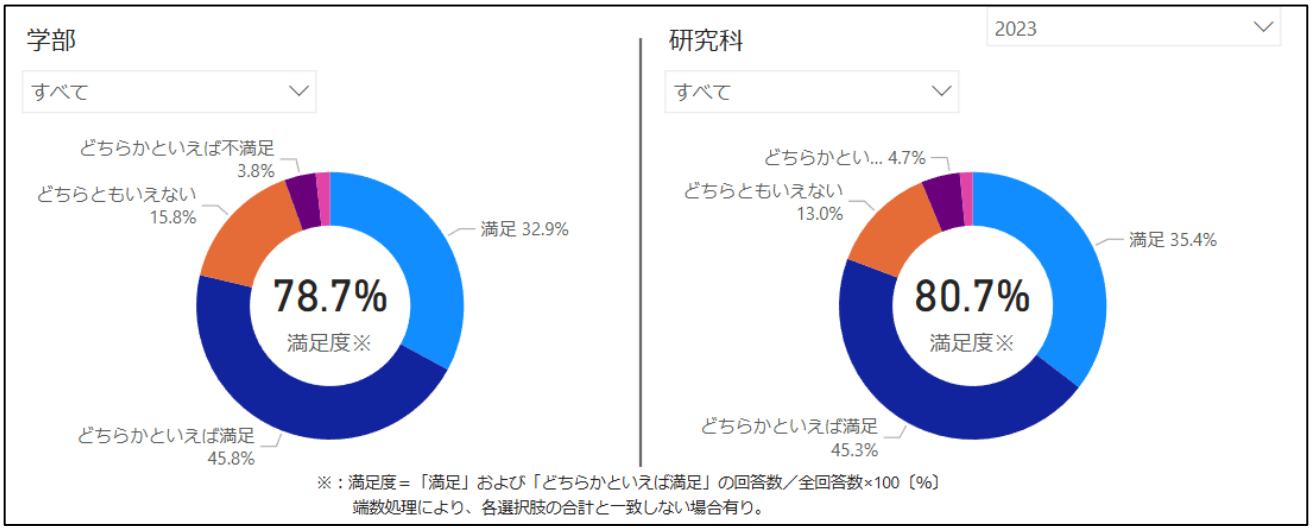
４－２　学生の成長実感・満足度

学生が、「卒業認定・学位授与の方針」に定められたそれぞれの資質・能力をどの程度身に付けられているか等に関する学生の主観的な評価を明らかにするため、また、「卒業認定・学位授与の方針」に定められた資質・能力の育成に関してどのような評価を受けているのかを明らかにするため、卒業・修了者を対象にアンケートを実施しています。令和４年度からは全学統一のアンケート項目とし、「卒業認定・学位授与の方針」に対しての認知度・達成度・感想等についてアンケートを実施しました。結果の概要は以下のとおりです。

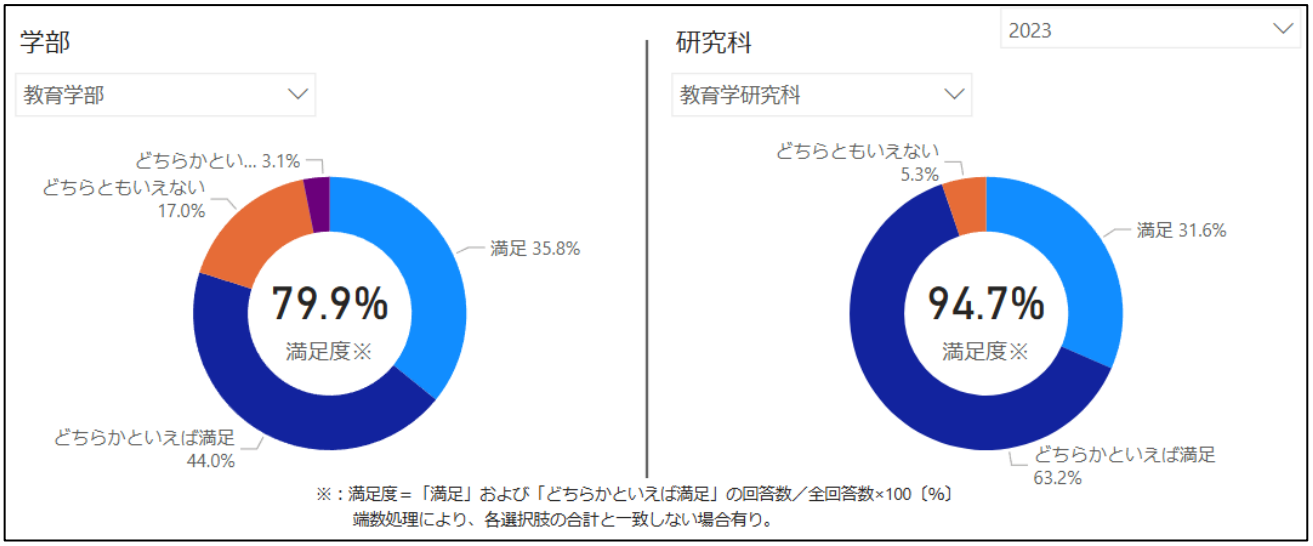
実施期間：令和６年１月～3 月
実施方法：moodle のアンケート機能にて実施
回答率　：全体９６．９％（卒業・修了者１，０７９名中１，０４６名回答）

教育学部	９９．４％
経済学部	９９．７％
システム工学部	９７．６％
観光学部	８５．７％
教育学研究科（教職開発専攻）	１００％
経済学研究科	１００％
システム工学研究科（博士前期課程）	９８．４％
観光学研究科（博士前期課程）	７２．７％
システム工学研究科（博士後期課程）	１００％
観光学研究科（博士後期課程）	１００％

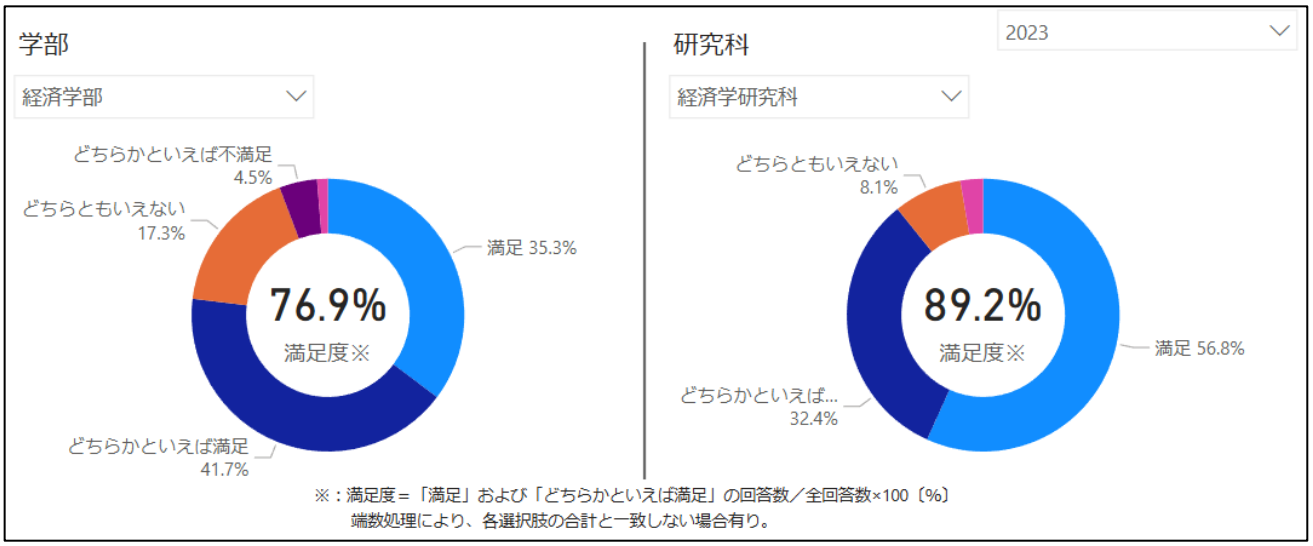
▸ **和歌山大学での教育内容全体の満足度について**



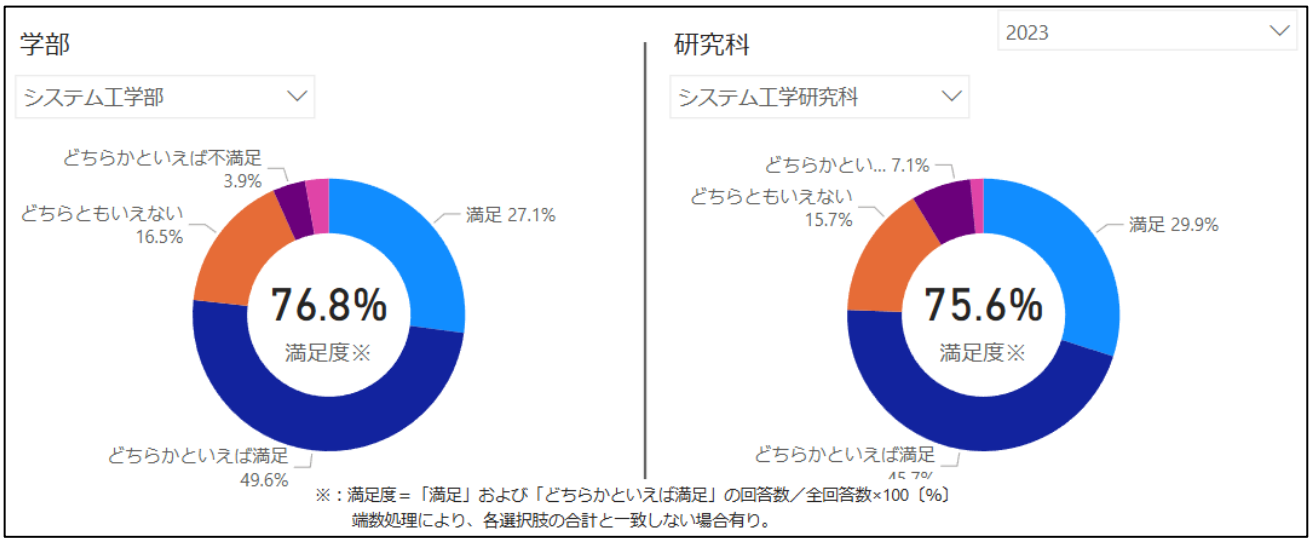
＜教育学部・教育学研究科＞



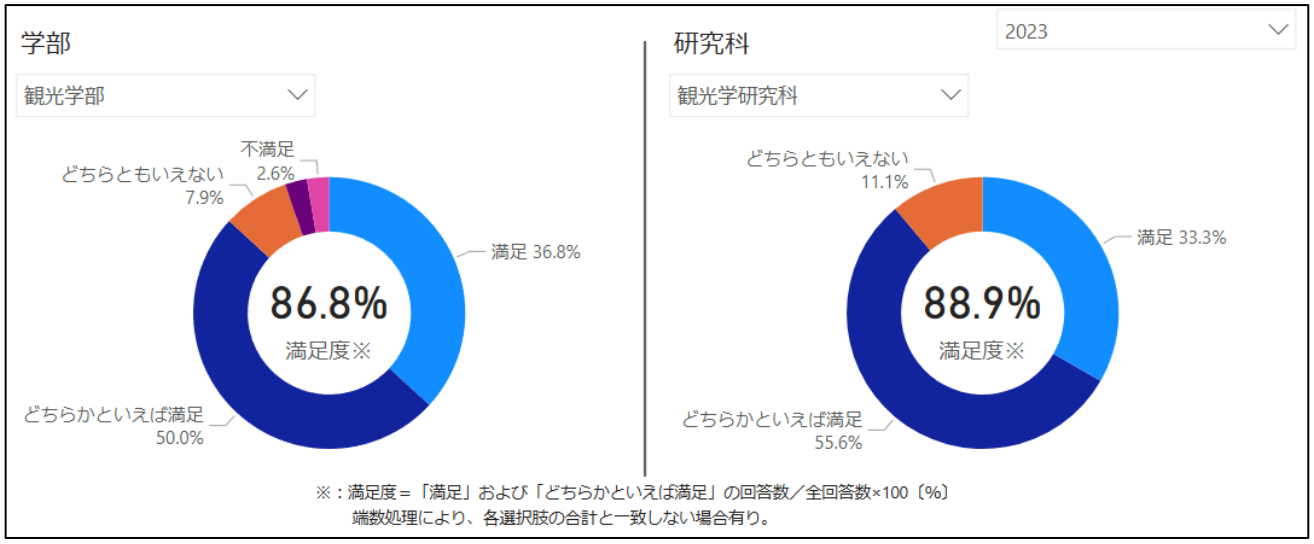
＜経済学部・経済学研究科＞



＜システム工学部・システム工学研究科＞



＜観光学部・観光学研究科＞



【分析状況】

昨年度と比較して、回答率が 82.9%から 96.9%に増加しており、アンケートの数値が実態を反映するものとなった。アンケートの結果は、7 割以上が「満足」または「どちらかといえば満足」という回答であった。学部については昨年度 76.6%が 78.7%に微増しているのに対して、研究科は 83.3%から 80.7%にわずかながら低下している。学部毎での結果をみると、経済学部と経済学研究科の満足度が昨年度に比べると、低下しており、その分析が望まれる。

＜各学部等からの分析結果＞

学部等	分析コメント
教育学部	教員免許状取得が卒業要件となっているため学生が学びに向かう意識は高く、また卒業（教員免許状取得）までのプロセスが充実していることから満足度は平均以上と高めであり、2022 年度より 2 ポイント UP した。今後は教育活動における学生の満足度をさらに高められるよう授業内容やゼミ活動の充実をはかる。
経済学部	「満足」および「どちらかといえば満足」の回答数を合わせた割合が 76.9%であり、80%以上の満足度が得られるよう、検討を進めていく。ただし、「授業等の教育活動」は、充実が望ましい内容の最上位に挙げられていることから、授業評価アンケートの結果も考慮し、学生の授業参加のあり方などを含め、今後検証を進めていく。
システム工学部	満足度が大学全体に比べ低い。 充実が望ましい内容として、「研究室・ゼミナールの活動」「授業等の教育活動」の回答者の割合が多い。実験設備や薬品等を使用する研究室では、それらの整備が不十分である場合もあるようである。 これらの点について、講義科目なのか、実験・演習科目なのか、また学部設備なのかなど、満足度 80%以上になるように、具体的に何に課題があるのかを今後、精査検証していく必要がある。

観光学部	教育内容への満足度は 86.8%であり、中期目標の 80%を上回る水準となった。観光学部の学生に特に目立つ傾向として、「充実が望ましい内容」に地域貢献活動や海外留学をあげる学生が多い点がある。こうした学外活動へのコロナ禍による強い制限が緩和され、活発な活動ができるようになってきたことが高い満足度の一因になっているものと考えられる。
教育学研究科	修了と同時に教員免許状（専修免許状）が取得できるカリキュラムとなっているため院生が学びに向かう意識は高く、また修了までのプロセスが充実していることから満足度は平均以上と高めであり、2022 年度より 5 ポイント UP した。
経済学研究科	「満足」および「どちらかといえば満足」の回答数を合わせた割合が 89.2%であり、多くの大学院生が卒業時に満足を感じていると判断できる。ただし、「研究室・ゼミナールの活動」は、充実が望ましい内容の最上位に挙げられていることから、研究室・ゼミナールでの教育の質改善に向けた取り組みを積極的に進める必要がある。
システム工学研究科	満足度が大学全体に比べ低い。 充実が望ましい内容として、「研究室・ゼミナールの活動」「授業等の教育活動」の回答者の割合が多い。実験設備や薬品等を使用する研究室では、それらの整備が不十分である場合もあるようである。具体的に何に課題があるのかを今後さらに検証していく必要がある。
観光学研究科	教育内容への満足度は 88.9%であり、中期目標の 80%を上回る水準となった。今後も、学生が成長実感を得られるような教育内容の改善に取り組んでいく必要がある。

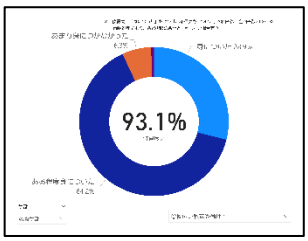
４－３　ディプロマ・ポリシーに定める資質・能力等の修得状況

卒業生・修了生を対象としたアンケートにて、学生が学位プログラムを通じて修得した資質・能力について質問を行いました。アンケート結果は以下のとおりです。

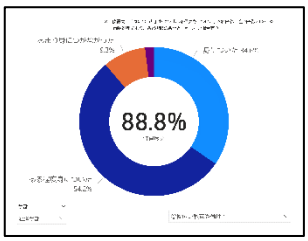
（学士課程）

①幅広い教養や倫理性

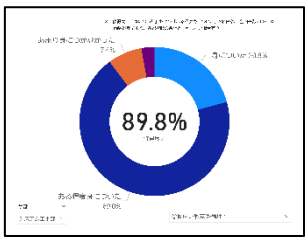
＜教育学部＞



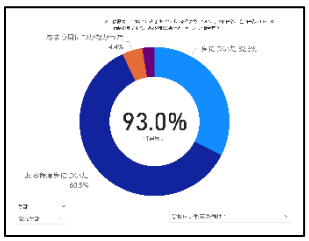
＜経済学部＞



＜システム工学部＞

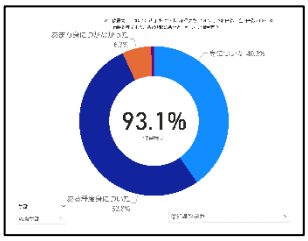


＜観光学部＞

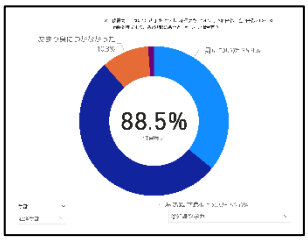


②知識や学力

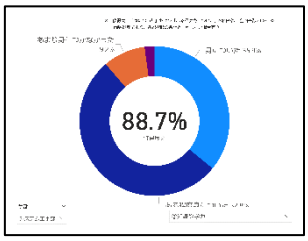
＜教育学部＞



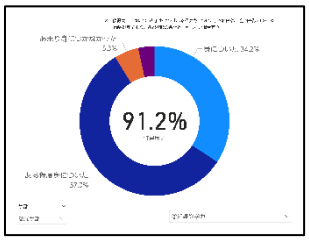
＜経済学部＞



＜システム工学部＞

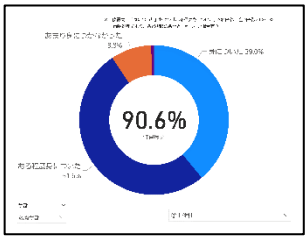


＜観光学部＞

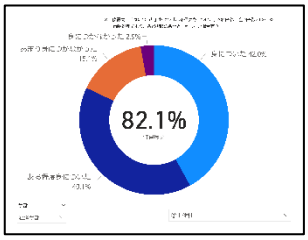


③主体性

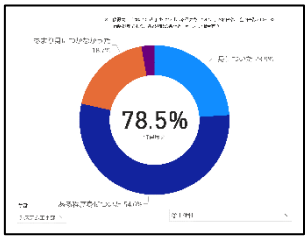
＜教育学部＞



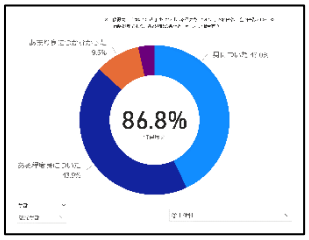
＜経済学部＞



＜システム工学部＞

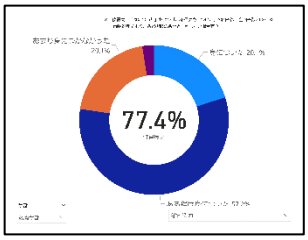


＜観光学部＞

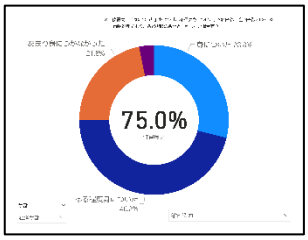


④創造力

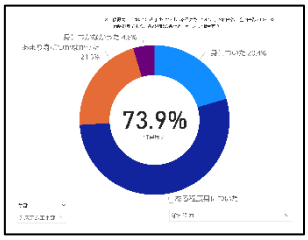
＜教育学部＞



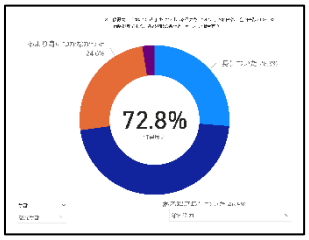
＜経済学部＞



＜システム工学部＞

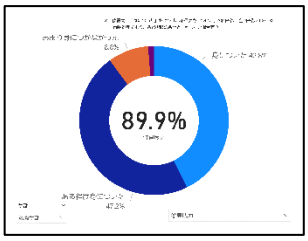


＜観光学部＞

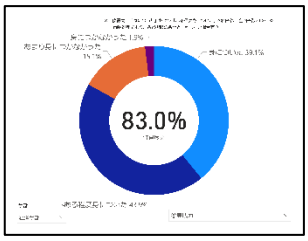


⑤実践力

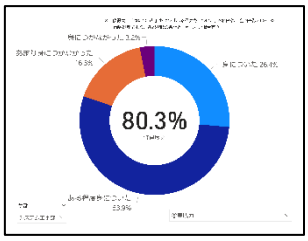
＜教育学部＞



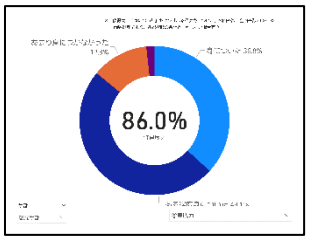
＜経済学部＞



＜システム工学部＞

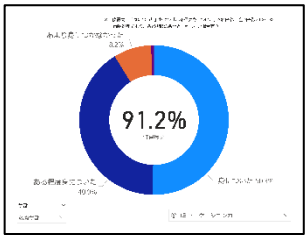


＜観光学部＞

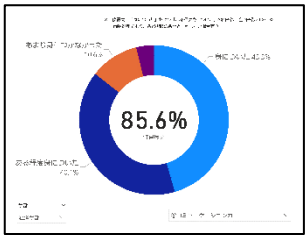


⑥コミュニケーション力

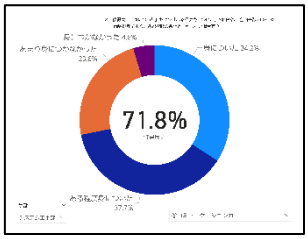
＜教育学部＞



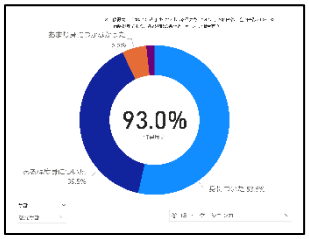
＜経済学部＞



＜システム工学部＞

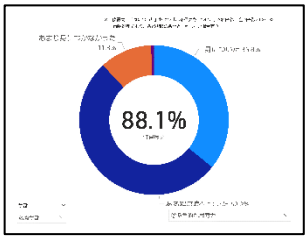


＜観光学部＞

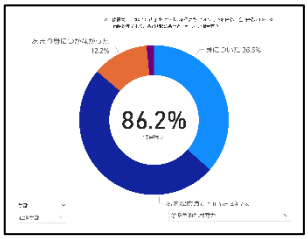


⑦多角的な思考力

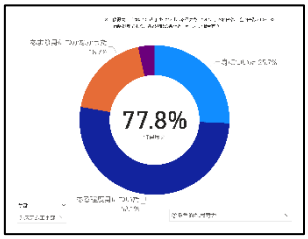
＜教育学部＞



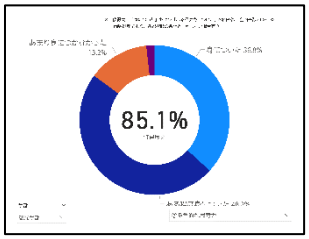
＜経済学部＞



＜システム工学部＞

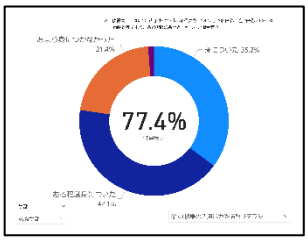


＜観光学部＞

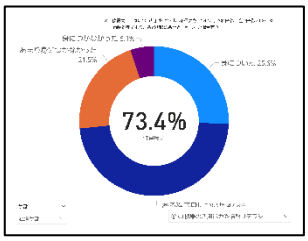


⑧ICT 機器の活用能力や情報リテラシー

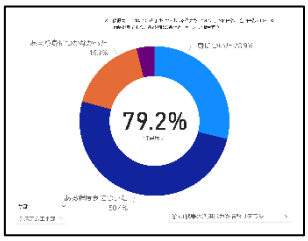
＜教育学部＞



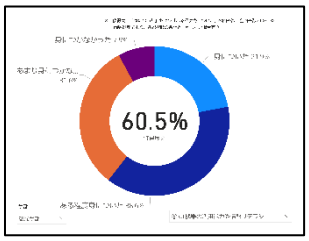
＜経済学部＞



＜システム工学部＞



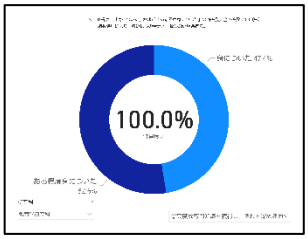
＜観光学部＞



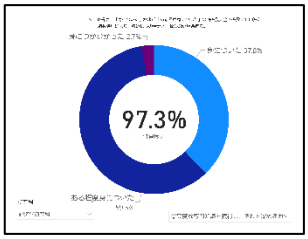
（修士・博士課程）

①高度な専門知識を獲得し、それを深める力

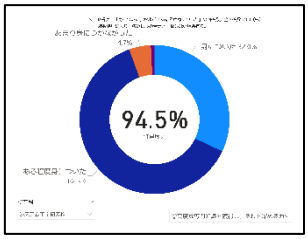
＜教育学研究科＞



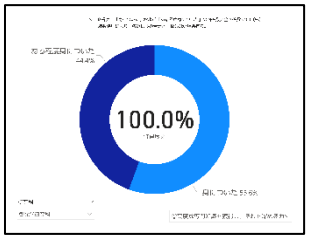
＜経済学研究科＞



＜システム工学研究科＞

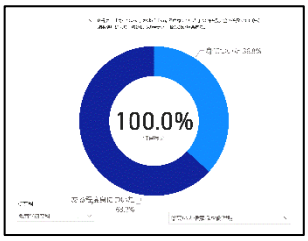


＜観光学研究科＞

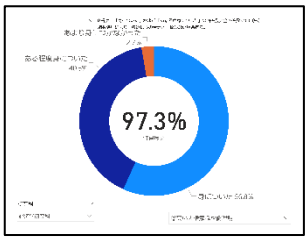


②高い人権意識や倫理観

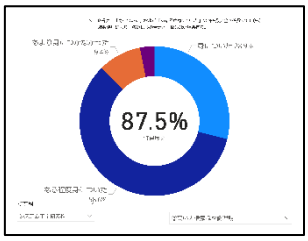
＜教育学研究科＞



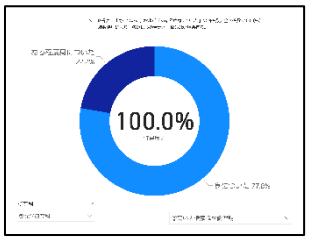
＜経済学研究科＞



＜システム工学研究科＞

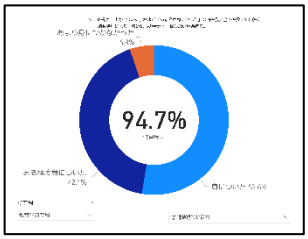


＜観光学研究科＞

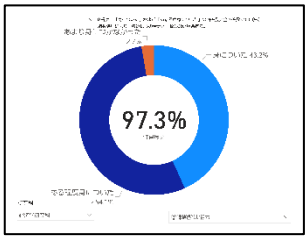


③課題解決能力

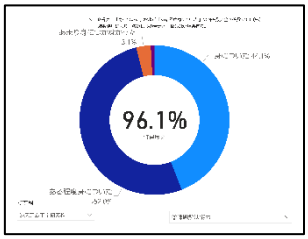
＜教育学研究科＞



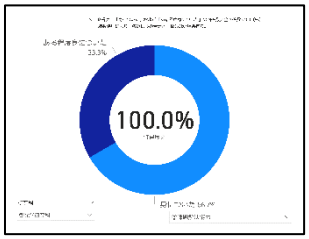
＜経済学研究科＞



＜システム工学研究科＞

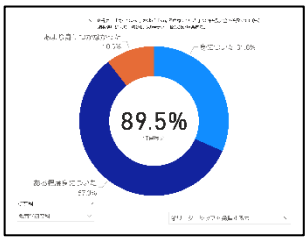


＜観光学研究科＞

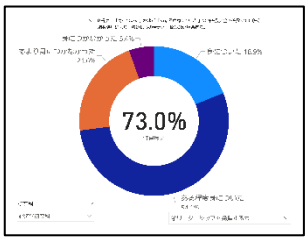


④リーダーシップを発揮する力

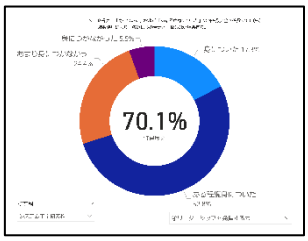
＜教育学研究科＞



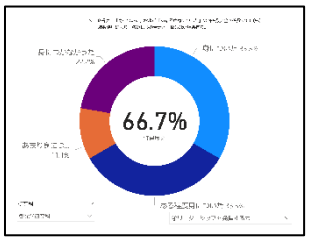
＜経済学研究科＞



＜システム工学研究科＞

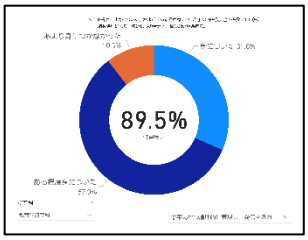


＜観光学研究科＞

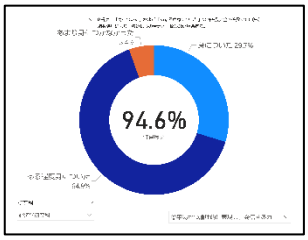


⑤平易かつ論理的に表現し、発信する力

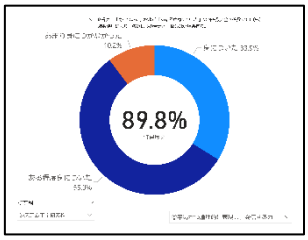
＜教育学研究科＞



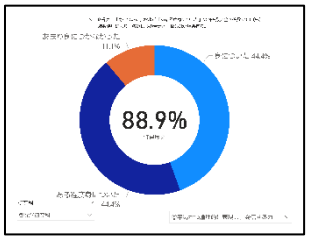
＜経済学研究科＞



＜システム工学研究科＞

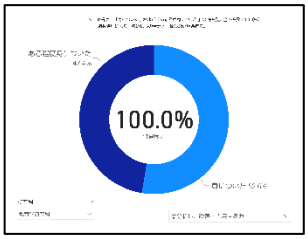


＜観光学研究科＞

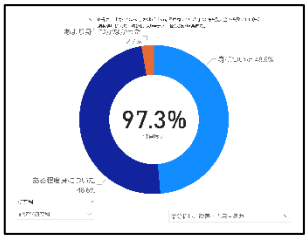


⑥分析し、改善・応用する力

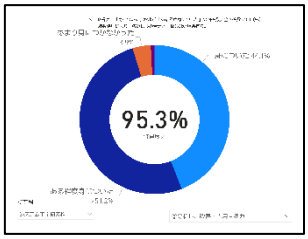
＜教育学研究科＞



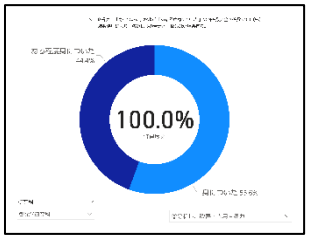
＜経済学研究科＞



＜システム工学研究科＞

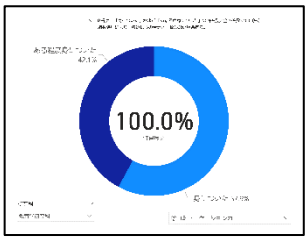


＜観光学研究科＞

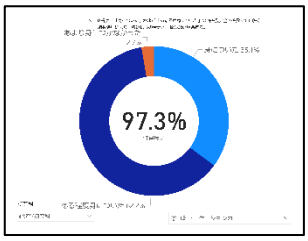


⑦コミュニケーション力

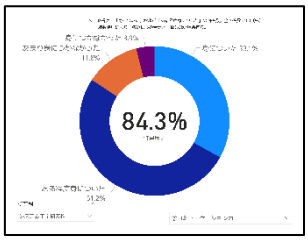
＜教育学研究科＞



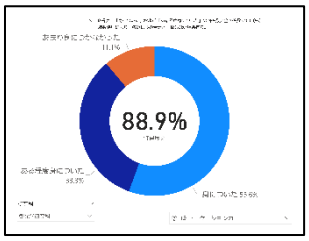
＜経済学研究科＞



＜システム工学研究科＞



＜観光学研究科＞



【分析状況】

大学全体としては「創造力」の育成のさらなる向上が求められている。各学部の課題としては、システム工学部では「コミュニケーション力」「多角的な思考力」「主体性」の育成が、観光学部では「ICT 機器の活用能力や情報リテラシー」の育成が課題となっている。これらの課題は、授業評価アンケート結果とも関係していると考えられる。その一方で、システム工学部では「幅広い教養や倫理性」（76.3%から 89.8%）、観光学部では「知識や学力」（75.0%から 91.2%）、経済学部では「ICT 機器の活用能力や情報リテラシー」（53.1%から 73.4%）は、昨年度から大きく改善している。

＜各学部等からの分析結果＞

学部等	分析コメント
教育学部	e-annual report のデータより分析した結果、資質・能力等の修得状況の 8 つの項目のうち、6 項目で他学部よりも上回り良好な結果が得られた。これは教員養成を主目的とするカリキュラムの特性から幅広く学びを深められた結果であると考えられる。しかし「⑧ICT 機器の活用能力や情報リテラシー」においては他の項目に比べて低い数字である。このことは 3-2「各授業科目における到達目標の達成状況（授業科目に関する情報）」の設問 8.「ICT 利用」の集計結果で「どちらともいえない」を含む肯定的ではない回答の割合が半数を上回っていることと関係していることが推測される。この原因の一つとしては、教育学部の開設科目で実習・実技等の授業の割合が多いことが考えられるが、今後は ICT の利活用を進めるよう授業内容の工夫を促し、学生の資質・能力等の向上を図っていく。

経済学部	「創造力」と「ICT 機器の活用能力と情報リテラシー」以外の資質・能力については、昨年度同様に 8 割を超える卒業生が修得したと自己評価している。 何ができれば、身についたと捉えてよいのか、人によって基準が違っていることが、その理由のひとつとして挙げられる。また、学部の特性上、「ICT 機器の活用能力や情報リテラシー」を身に付けるための科目は多くないことも、習得度がやや低い理由と考えられる。
システム工学部	創造力を養うような工夫が必要であると考えられる（73.9%）が、学部では基礎的な専門知識を修得するための講義が多いことが、満足度の低いことの一因であると考えられる。 コミュニケーション力が他学部に比べて低い（71.8%）ので、工夫が必要であると考えられる。 ICT 機器の活用能力が意外と低い（79.2%）。また、在校生に対する授業評価アンケートの ICT 利用に関する満足度の項目においても、満足と感じている学生が 53%となっている。卒業生が求める活用能力に関するアンケート調査だけでなく、在校生に対しても同様のアンケート調査を実施し、関連性を調査することで、対策を立てることができるかもしれない。
観光学部	ディプロマ・ポリシーに定める資質・能力等について、全体として高い水準で身についたものと考えられる。修得に関与した活動として授業、ゼミナール、研究が多く回答される傾向は大学として当然のことであるが、「主体性」「実践力」「コミュニケーション力」の各項目で部活・サークル活動および地域貢献活動の関与が高いことは興味深い傾向である。また、「ICT 機器の活用能力や情報リテラシー」は全体と比較して低めの水準となっているが、教育内容の見直しを進めており、今後の動向を注視する必要がある。
教育学研究科	項目 3「課題解決能力」と項目 5「平易かつ論理的に表現し、発信する力」では、他学部に比べてやや課題が残る結果となったが、一定の水準に達していることでもあり今後、引き続き学生が身に付ける資質・能力のレベルアップを図っていく。
経済学研究科	「リーダーシップを発揮する力」以外の資質・能力については、昨年度同様に 8 割を超える卒業生が修得したと自己評価している。「リーダーシップを発揮する力」に関しては、同一研究室に所属する学生数が少ないことと、個人のテーマの独立性が高いことから、リーダーシップを発揮する機会も少ないと考えられる。そのためにそのような能力が身に着いたかどうかを判断することが簡単ではないものと推測される。概ねディプロマ・ポリシーに定める資質・能力を修得していると判断できる。
システム工学研究科	課題解決能力が 96.1%と高く、これは「システム工学研究」の効果が反映されている可能性がある。 リーダーシップ力が 70.1%と低水準であり、改善のための工夫が必要であると考えられる。一方で、コミュニケーション力は学部との比較で 84.3%と高く、これは「システム工学講究」の効果が反映されている可能性がある。

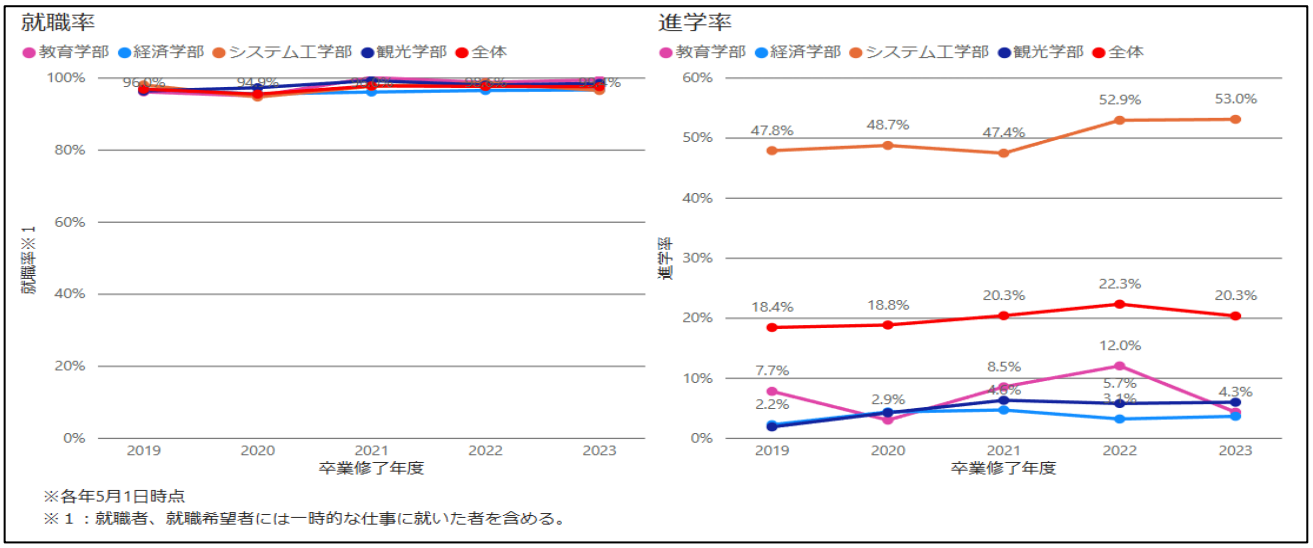
観光学研究科	総じて高い水準で資質・能力等が身についたものと考えられる。全体と比較して「リーダーシップを発揮する力」のみ低めの水準に留まっているが、授業での成長実感がわかりにくく、学生の自己評価が相対評価となりやすい項目であることが影響したものと考えられる。

４－４　進路の決定状況等の卒業後の状況（就職率や進学率等）

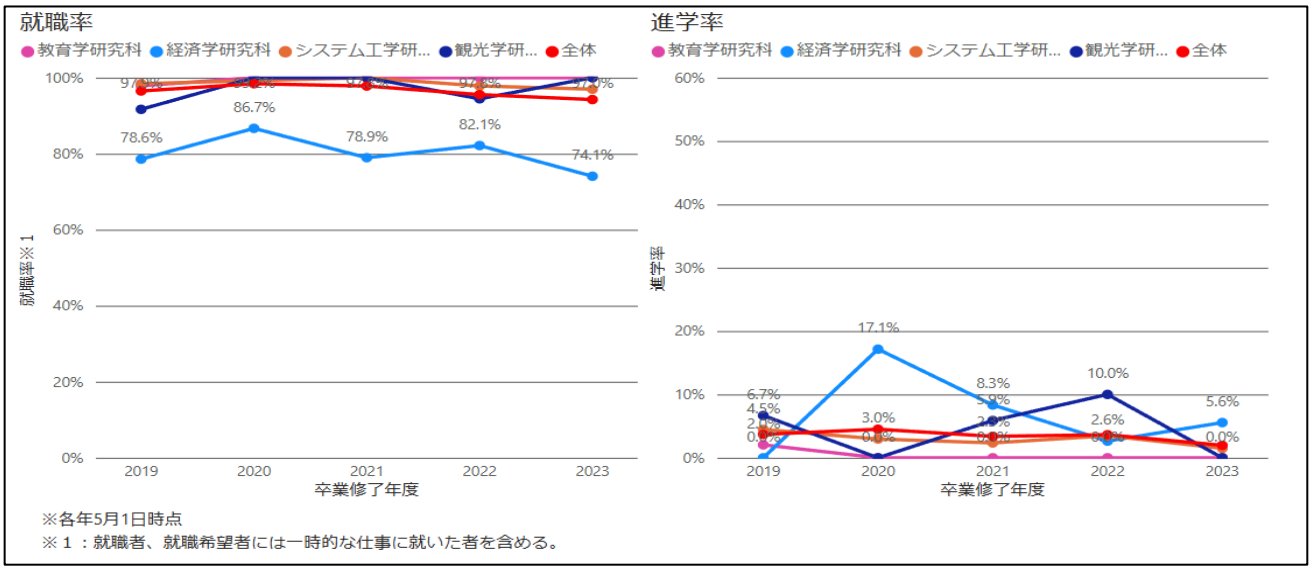
大学が、就職や進学等を希望する学生に対して進路を保証できているかを明らかにするため、卒業生・修了生の就職率及び進学率を以下に示します。

▸　**卒業生・修了生の進路状況について**

＜学部＞



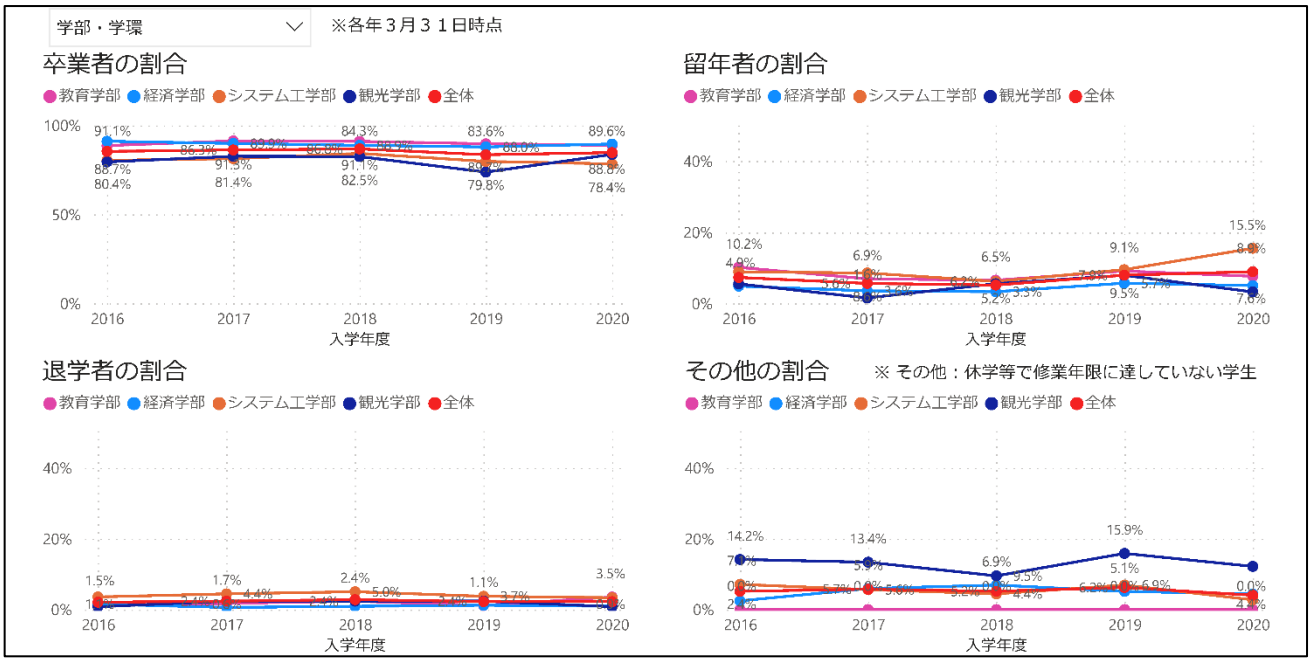
＜大学院研究科＞



４－５　修業年限期間内に卒業する学生の割合、留年率、中途退学率

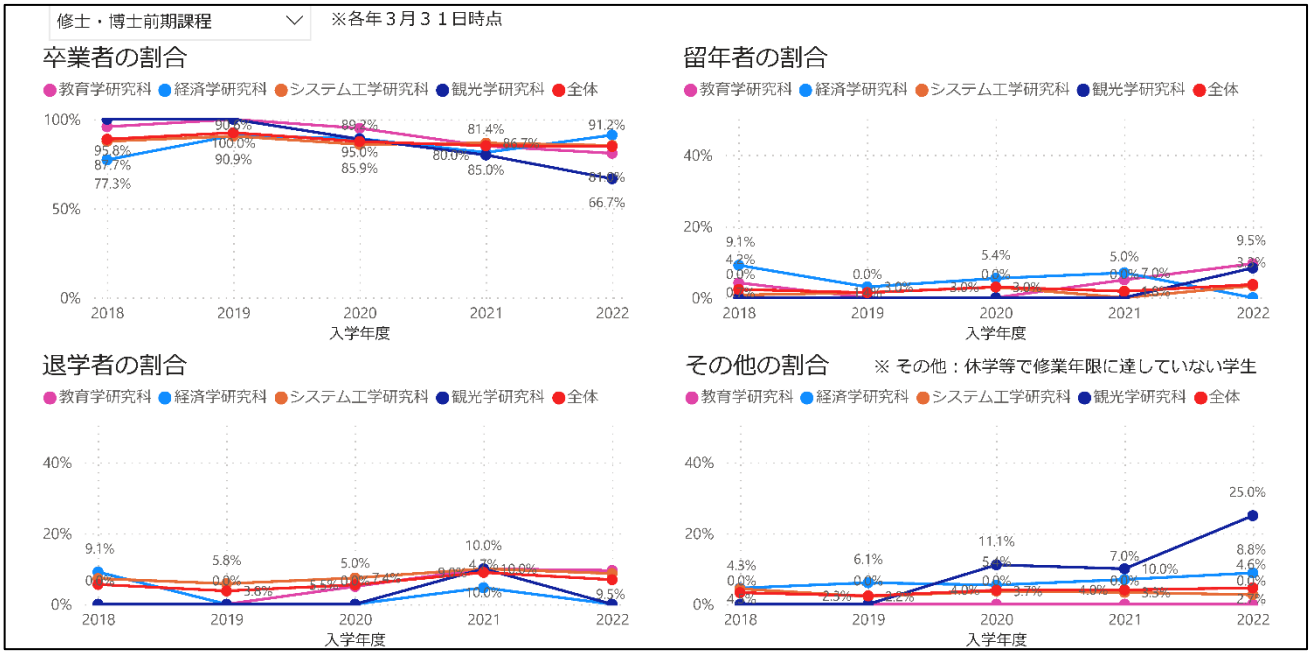
大学が、修業年限期間内において学生の資質・能力を計画的に伸ばし、学位の取得まで到達させていることを明らかにするため、修業年限期間内に卒業する学生の割合、留年率、中途退学率を以下に示します。

＜学部＞

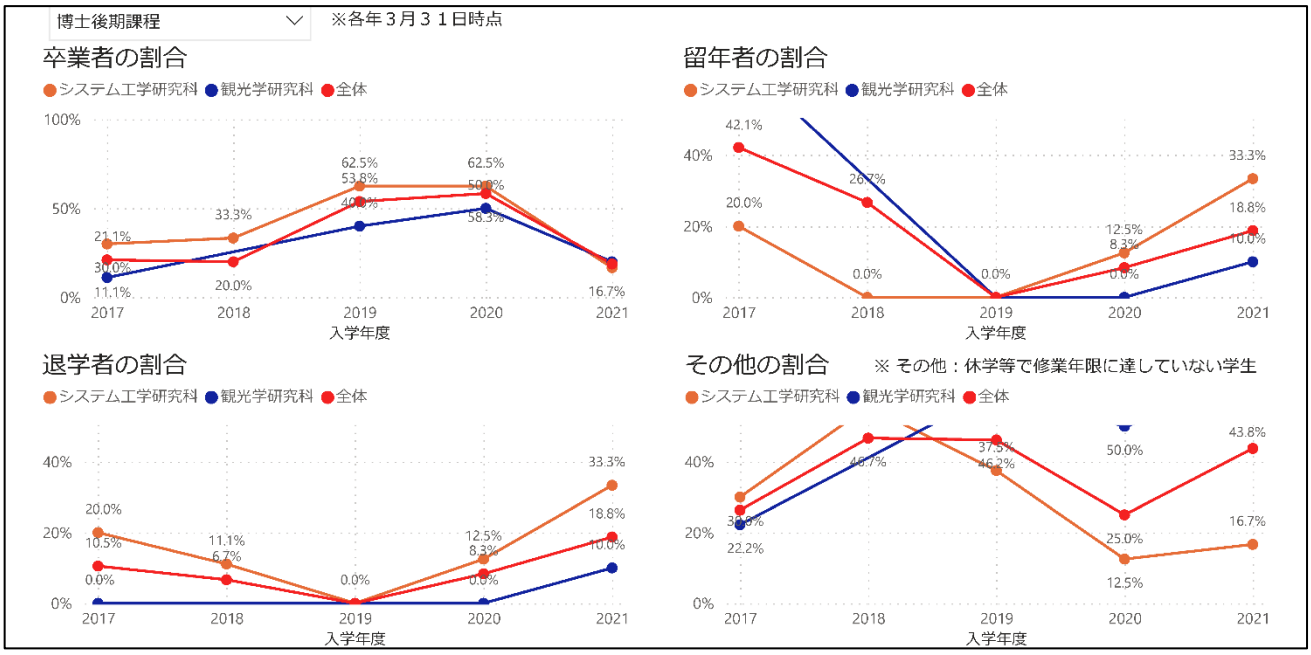


※卒業者、留年者、退学者等の割合には３年次編入者を含む。また、「その他」には長期履修者、短期履修者は含まない。

＜修士・博士前期課程＞



＜博士後期課程＞



【分析状況】

就職率は 99%と、この数年間、高水準を維持している。その一方で、卒業者や留年者の割合からは、システム工学部において課題があることが読み取れる。観光学部の「その他の割合」が多い理由は、海外留学等を理由により休学した学生が増加したためである。

＜各学部等からの分析結果＞

学部等	分析コメント
教育学部	e-annual report のデータより分析した結果、卒業者については、平均的な状況である。留年者、退学者については、教師以外の進路希望者であることが多いため、教師になるためのカリキュラムにミスマッチを感じることも一因と考えられる。
経済学部	卒業者の割合は 80%以上、留年者の割合は 3～5%、退学者の割合は 0.6～1.5%の範囲に留まり、他学部と同水準で推移している。留年者と退学者の割合からは、留年者が必ずしも退学に至るのではなく、標準修業年限を超えて卒業する者もいることがうかがえる。
システム工学部	全国の工学系大学の卒業率はおおよそ 80%であるため、全国平均よりも若干高いように思われる。1 年時の入門セミナーや学期ごとの教務ガイダンスによる効果が表れているのかもしれない。 全国の工学系大学の退学者の割合はおおよそ 2%であり、5 年間の平均で見ると 2%程度であるので、全国平均と同程度であると思われる。

観光学部	留年者の割合、退学者の割合とも特に目立った傾向は見られない。一方で、他学部と比較して休学等の「その他の割合」が多く、海外留学等を理由に休学する学生の存在が影響したものと考えられる。
教育学研究科	e-annual report のデータより分析した結果、留年者の割合がやや上昇しているが、母数(入学者数）が小さいため、一人でも留年すると割合が上昇する傾向がある。今後も、少人数であることを活かし履修等への丁寧な指導やサポートを引き続き行いたい。
経済学研究科	卒業者の割合は 80%以上、留年者の割合は 10%未満、退学者の割合は 10%未満であり、概ね他研究科と同水準であるが、留年者の割合が他研究科に比べて多い。具体的に何に課題があるのかを今後検証していく必要がある。
システム工学研究科	前期課程： 5 年間の平均の修了率が 9 割程度である。学部に比べると増加している。 5 年間の平均の留年率が 2%程度である。学部に比べると大幅に減少している。これらの傾向は、大学院 2 年間の研究指導により、学生の資質・能力を伸ばし学位の取得まで到達できていると考えられる。 後期課程： 5 年間の平均の修了率が 3 割程度である。 5 年間の退学者の割合が 0〜3 割程度と大きく変動している。 厳格な博士号審査が行われている結果だと考えられる。
観光学研究科	人数が少ないため少数の学生の動向が目立ってあらわれてしまう傾向がある。博士前期課程については休学者の存在が数値にあらわれており、博士後期課程については社会人学生の割合が高く、仕事の都合が優先されるといった行動が反映されたものと考えられる。

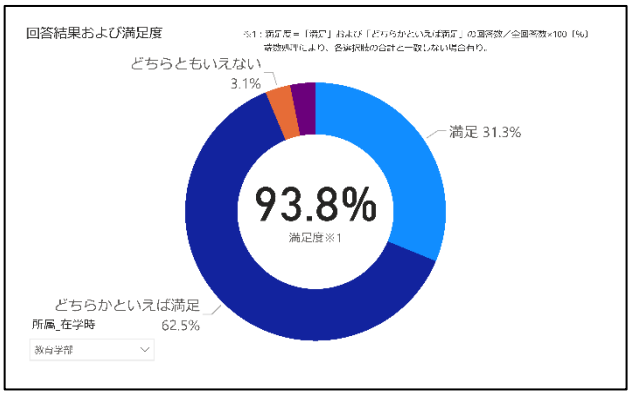
４－６　卒業生からの評価

学位プログラムを通じて身に付けた資質・能力が、進学先や就職先でどのように役立っているかを、進学・就職から一定期間経過した卒業生からの評価により明らかにするため、アンケートを実施しています。令和５年度に実施したアンケートの概要については、以下のとおりです。

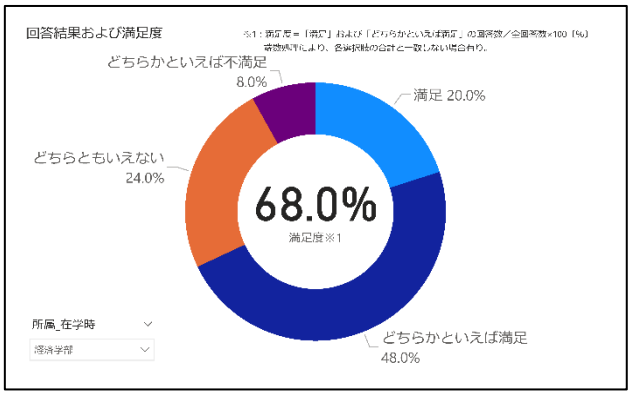
アンケート対象：令和元年度卒業生・修了生（卒業・修了から３年経過）
実施期間：令和６年１月１日～１月３１日
実施方法：はがき郵送による案内、アンケートフォームによる回答
回答率　：13.2%（卒業者数からはがき未着数を除いた数を分母とした）

▸ **和歌山大学の教育内容全体に対する満足度について**

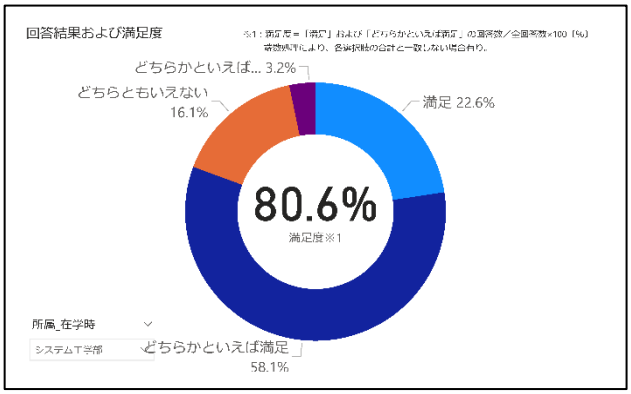
＜教育学部＞



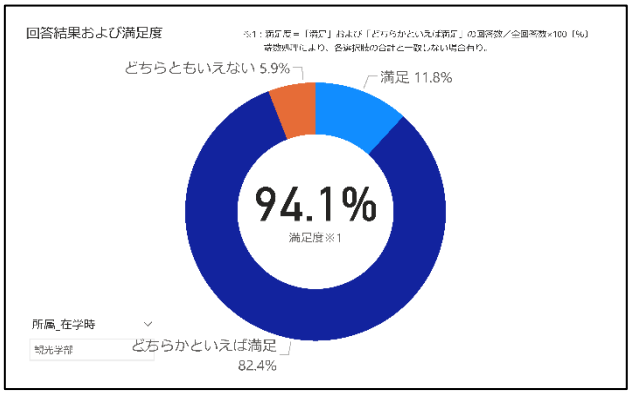
＜経済学部＞



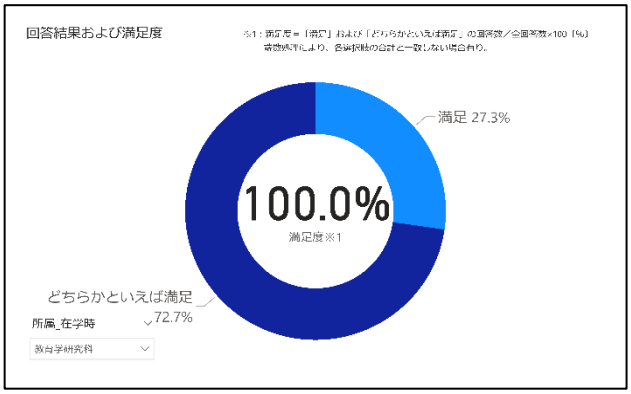
＜システム工学部＞



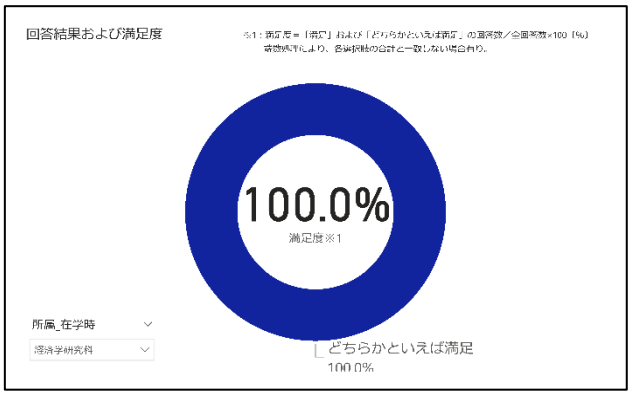
＜観光学部＞



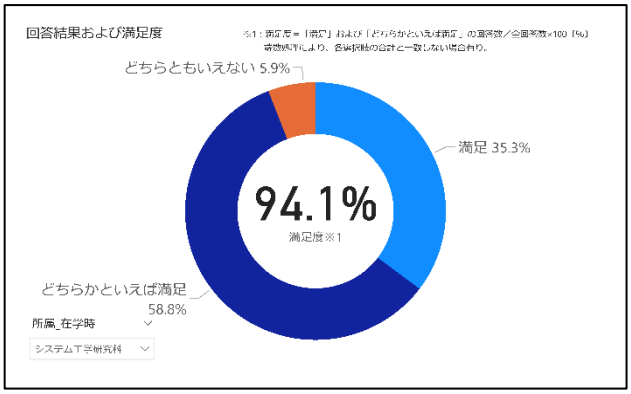
＜教育学研究科＞



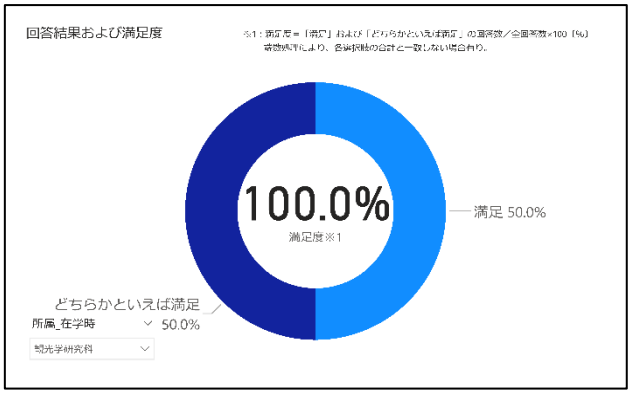
＜経済学研究科＞



＜システム工学研究科＞



＜観光学研究科＞



【分析状況】

アンケートの回答率（11.5%から 13.2%）が若干向上したものの、昨年度と同様、回答者数を増やす努力をしていくことが、まず課題となっている。昨年度からシステム工学部の満足度が大きく改善しているのに対して（60.5%から 80.6%）、経済学部の満足度が 81.3%から 68%に大きく下がっており、その理由の分析が必要である。

＜各学部等からの分析結果＞

学部等	分析コメント
教育学部	e-annual report のデータより分析した結果、全体として 93.8%と高くなっている。学校教員に就職した学生の満足度は高いが、他の業種を進路とした場合に満足度は低下する。目的養成の学部でありやむをえないところもあるが、今後は他の業種を進路とする学生に対しては科目の履修を通して身に付けた力を教員以外の業種であっても生かせる等キャリアガイダンスのなかで適切に指導を行う。
経済学部	回答数が少なく、分析・コメントには限界があることは前提であるが、「満足」および「どちらかといえば満足」の合計割合が 68.0%であった。製造業の満足度が 38.9%、金融業の満足度が 35.8%減少している。経済学部の卒業生は、職種別採用されるケースは少数で、入社後に配属を決められることが多い。そのため、所属プログラムでの学びと就職してからの配属職種が直結しないケースが多く想定される。経験を積みマネジメントをする立場となったときに、学部での学びが活かされる可能性がある。大学での学習と就職先とのミスマッチを防ぐため、卒業直後の短期的なキャリアだけではなく、中期的キャリアを見据えたキャリア支援を行っていく。
システム工学部	アンケートの回答率が低いので、満足度の割合だけでは分析するのが難しい。全体の満足度が他の学部に比べ 80.6%と低い。就職先の業種によって、満足度に差が出ている。例えば、建設業と製造業に就職した学生の満足度は、それぞれ 100%と 66.7%である。システム工学部では、多くの業種に就職するため、このような結果になっていると考えられる。

観光学部	「満足」と「どちらかといえば満足」をあわせると 94.1%となり、不満足に感じている割合も低いことから、満足度の水準は総じて高いものと推察できる。回答数が少ないため、業種別の満足度の比較分析は行なっていない。
教育学研究科	e-annual report のデータより分析した結果、100%と高い数字になっている。ストレートマスターにおいては学部での学びに加え高いレベルの実践的指導力が獲得できたこと、また現職院生においては現任校における課題への対応を「理論と実践の往還」による学びにより獲得することができたことが高い評価につながったと考えられる。
システム工学研究科	アンケートの回答率が低いので、満足度の割合だけでは分析するのが難しい。 満足度が 94.1%であり、学部と比べると満足度が向上している。 学部に比べると就職先の業種によって満足度に差がない。例えば、建設業と製造業に就職した学生の満足度は、両方とも 100%である。

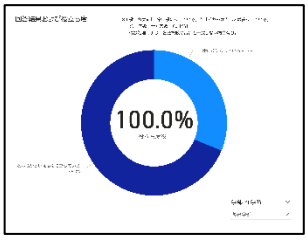
※回答数が極端に少ない学部等については分析が困難なため、分析コメントを掲載していません。

▸ **和歌山大学での学びを通して①～⑦の資質や能力が身につきましたか。**

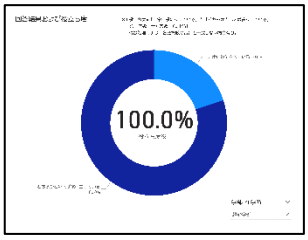
（学士課程）

①幅広い教養や倫理性

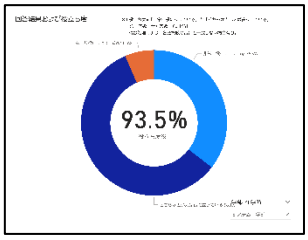
＜教育学部＞



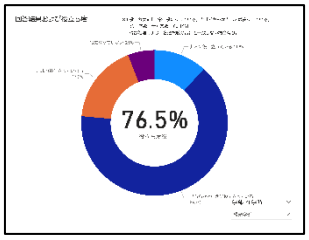
＜経済学部＞



＜システム工学部＞

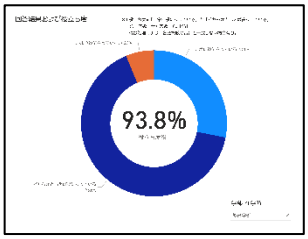


＜観光学部＞

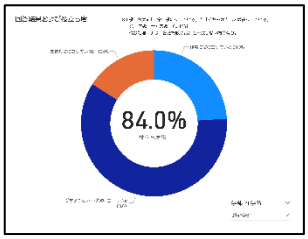


②知識や学力

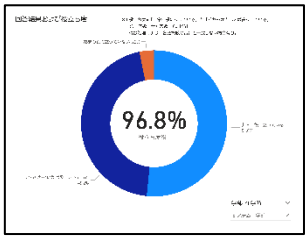
＜教育学部＞



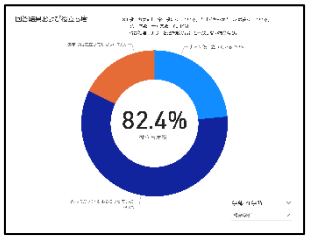
＜経済学部＞



＜システム工学部＞

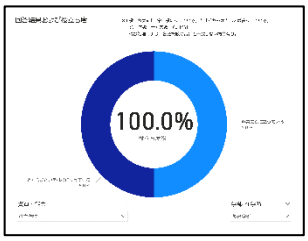


＜観光学部＞

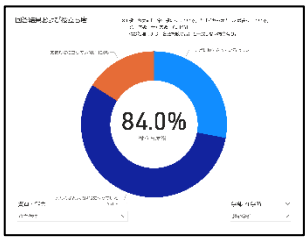


③主体性

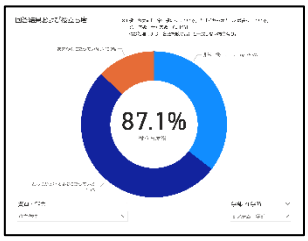
＜教育学部＞



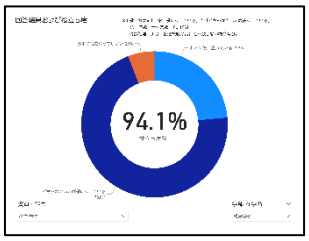
＜経済学部＞



＜システム工学部＞

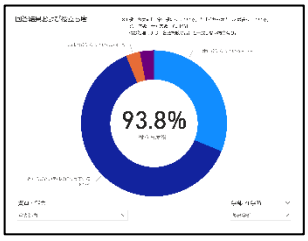


＜観光学部＞

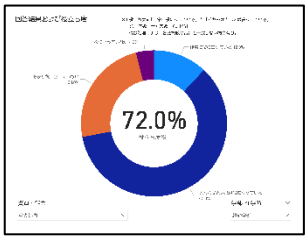


④創造力

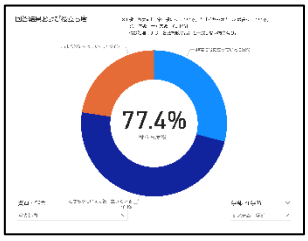
＜教育学部＞



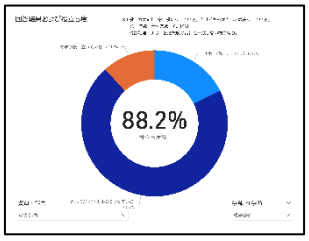
＜経済学部＞



＜システム工学部＞

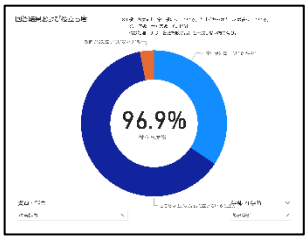


＜観光学部＞

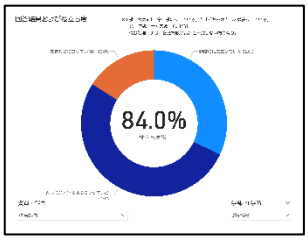


⑤実践力

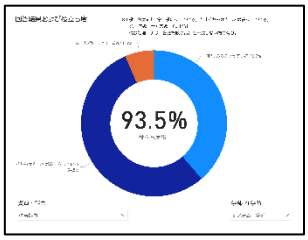
＜教育学部＞



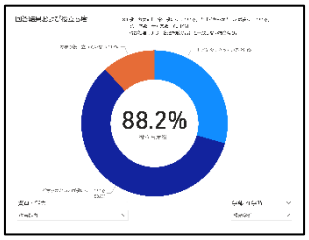
＜経済学部＞



＜システム工学部＞

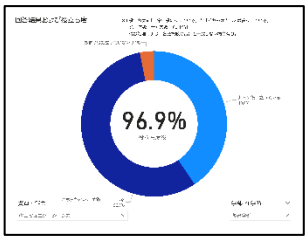


＜観光学部＞

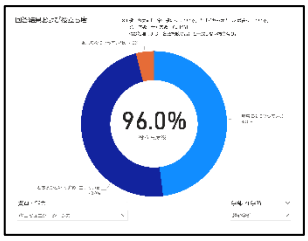


⑥コミュニケーション力

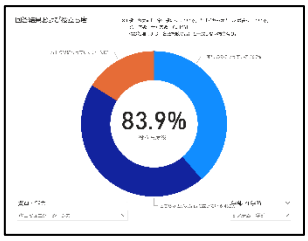
＜教育学部＞



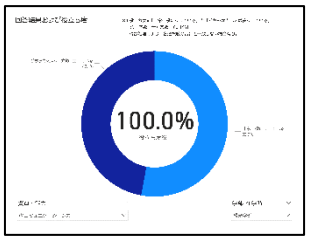
＜経済学部＞



＜システム工学部＞

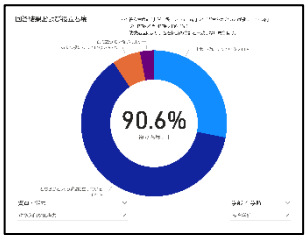


＜観光学部＞

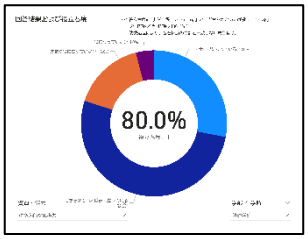


⑦多角的な思考力

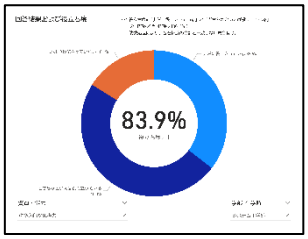
＜教育学部＞



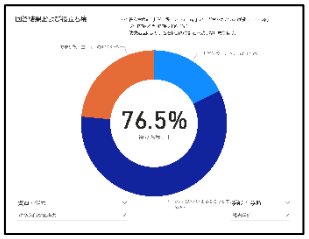
＜経済学部＞



＜システム工学部＞



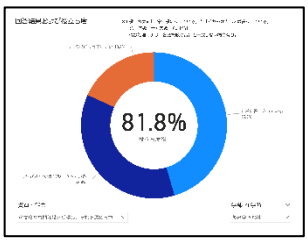
＜観光学部＞



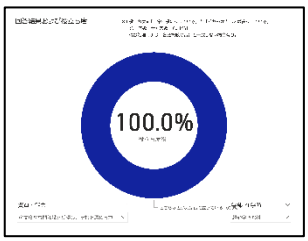
（修士・博士課程）

①高度な専門知識を獲得し、それを深める力

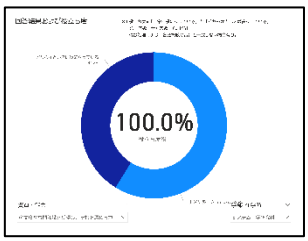
＜教育学研究科＞



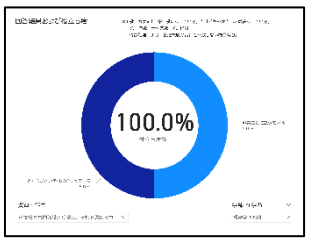
＜経済学研究科＞



＜システム工学研究科＞

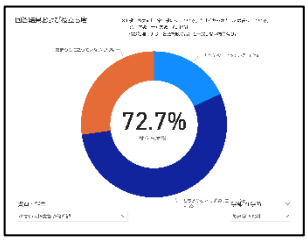


＜観光学研究科＞

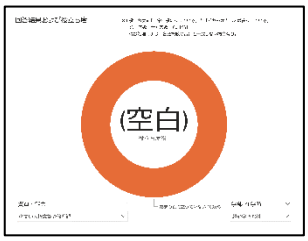


②高い人権意識や倫理観

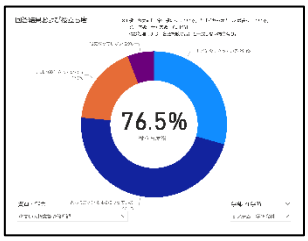
＜教育学研究科＞



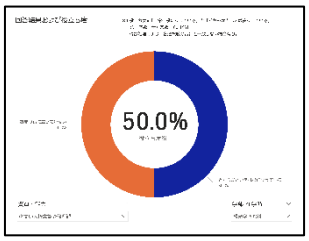
＜経済学研究科＞



＜システム工学研究科＞

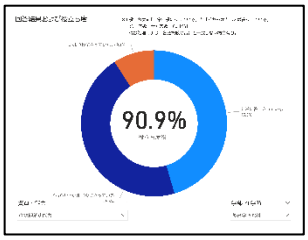


＜観光学研究科＞

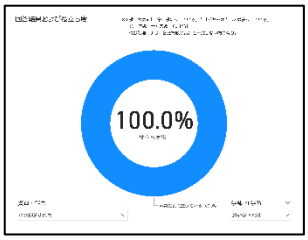


③課題解決能力

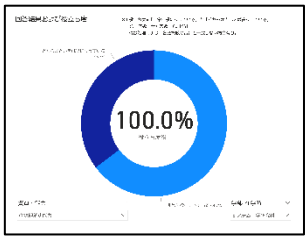
＜教育学研究科＞



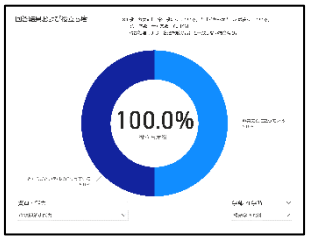
＜経済学研究科＞



＜システム工学研究科＞

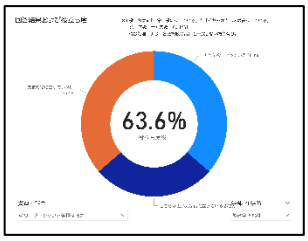


＜観光学研究科＞

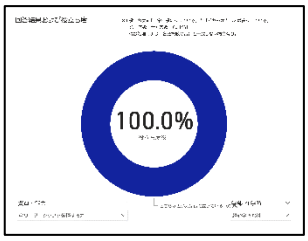


④リーダーシップを発揮する力

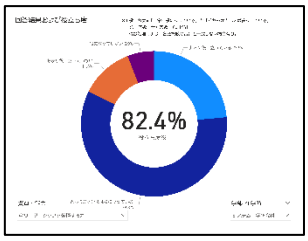
＜教育学研究科＞



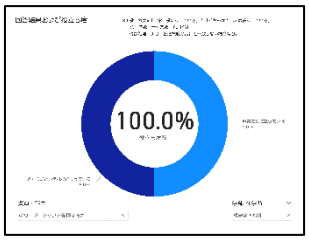
＜経済学研究科＞



＜システム工学研究科＞

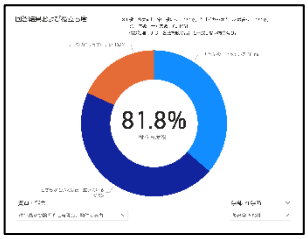


＜観光学研究科＞

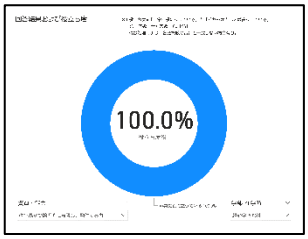


⑤平易かつ論理的に表現し、発信する力

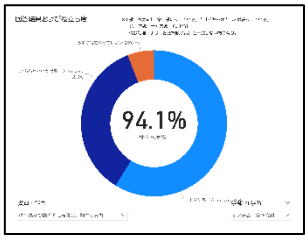
＜教育学研究科＞



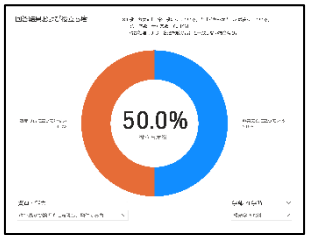
＜経済学研究科＞



＜システム工学研究科＞

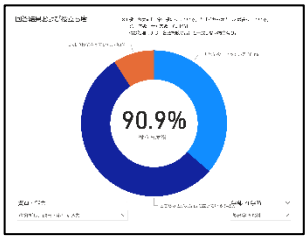


＜観光学研究科＞

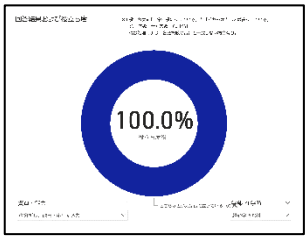


⑥分析し、改善・応用する力

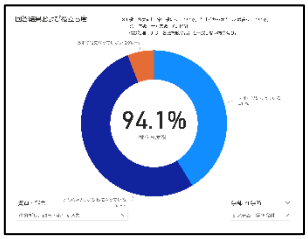
＜教育学研究科＞



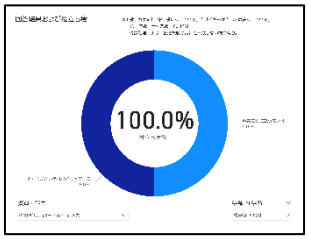
＜経済学研究科＞



＜システム工学研究科＞

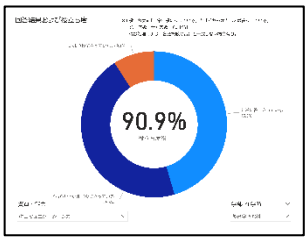


＜観光学研究科＞

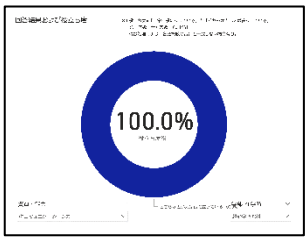


⑦コミュニケーション力

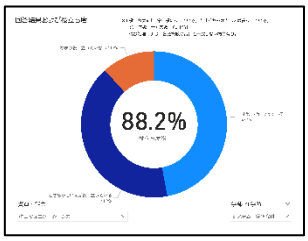
＜教育学研究科＞



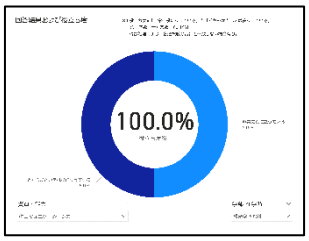
＜経済学研究科＞



＜システム工学研究科＞



＜観光学研究科＞



【分析状況】

学部については、在学生への調査結果と同様、創造力を育成する場や機会に課題がある。また、研究科については「高い人権意識や倫理観」の育成に課題がみいだせる。ただし、学部では創造力を身につけたという卒業生の割合は、昨年度よりも全学部において向上しており、卒業生に対するアンケートにおいても企業から高い評価を得られている。さらに「幅広い教養や倫理性」についても昨年度よりも向上している。

多くの企業が卒業生に期待する資質・能力として「主体性」と「コミュニケーション力」がある。これらは、卒業生アンケートによれば「部活動やサークル」で最も育成されている。「部活動やサークル」以外の活動、例えば授業や研究室・ゼミナール等において、どのようにそれらを育成していくのかが課題となる。

＜各学部等からの分析結果＞

学部等	分析コメント
教育学部	e-annual report のデータより分析した結果、幅広い教養や倫理性、知識や学力、主体性、創造力、実践力、コミュニケーション力、多角的な思考力においては満足度が高い。これは教員免許状取得に向けたカリキュラムが、幅広く理論と実践の科目を学ぶよう構成されていることが関係しているものと推測される。
経済学部	サンプルサイズが極めて小さいことを留意する必要があるが、「非常に役に立っている」と「どちらかといえば役に立っている」を合わせた回答割合の上位 3 つが「幅広い教養や倫理性」（100%）、「コミュニケーション力」（96.0%）、「知識や学力」、「主体性」、「実践力」（いずれも 84.0%）であった。幅広い教養と倫理性が最上位項目となっている点が昨年度と異なる点であり、教養と倫理性を基礎に専門的知識能力が修得されていると考えられる。
システム工学部	学部では基礎的な専門知識を修得するための講義が多いため、知識や学力の満足度は高い。一方で、そのような講義が多いため、創造力の満足度が低い（77.4%）。創造力を養うような工夫が必要であると考えられる。 コミュニケーション力が他学部に比べて低い（83.9%）ので、工夫が必要であると考えられる。
観光学部	項目によって幾分ばらつきは見られるものの、学部の教育プログラムをとおして所定の資質・能力が身につき、それらが進学先や就職先で役立ったと評価されている。
教育学研究科	e-annual report のデータより分析した結果、7 つの項目で比較的高い数字となっているが、項目 4「リーダーシップを発揮する力」で 63.6%と他学部に比べて低い数字である。「リーダーシップを発揮する力」は教員として必要な資質・能力であり、特に現職院生は現場での実践経験を通し高い基準で評価を行っていることが低い評価となった要因として考えられる。
システム工学研究科	リーダーシップ力が 82.4%と低水準であり、改善のための工夫が必要であると考えられる。一方で、平易かつ論理的に表現し、発信する力が 94.1%と高く、コミュニケーション力が学部に比べて高くなっている（88.2%）、これらは「システム工学講究」の効果が反映されている可能性がある。

※回答数が極端に少ない学部等については分析が困難なため、分析コメントを掲載していません。

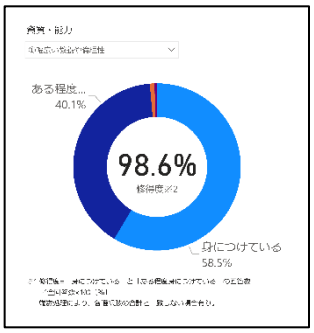
４－７　卒業生に対する評価

企業等に採用された本学卒業生が学位プログラムを通じて身に付けた資質・能力等について、合同企業説明会参加企業にアンケートを実施しています。令和５年度に実施したアンケートの概要については、以下のとおりです。

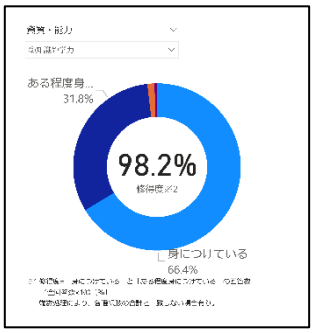
アンケート対象：合同企業説明会参加企業
実施期間：令和６年２月～3 月
実施方法：Microsoft Forms のアンケート機能による実施
回答企業数：227 社（うち、本学卒業生が在籍している企業 85.9%）

▸ **採用された和歌山大学卒業生が、次の資質や能力を身につけていると思いますか。**

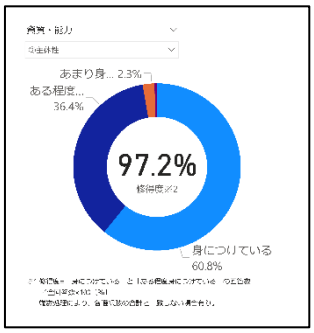
①幅広い教養や倫理性



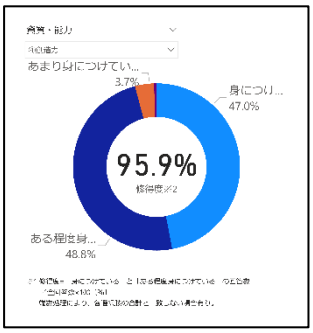
②知識や学力



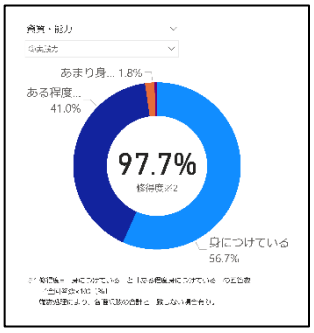
③主体性



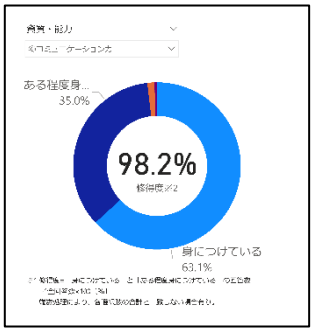
④創造力



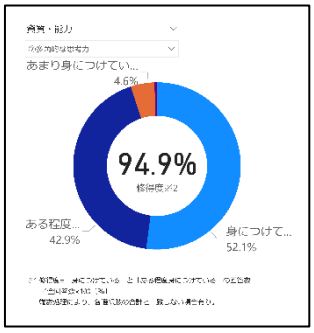
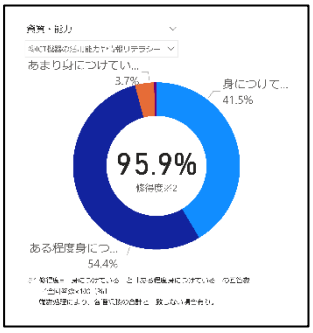
⑤実践力



⑥コミュニケーション力



⑦多角的な思考力



⑧ICT 機器の活用能力や情報リテラシー